



## 江戸・東京の都市史および都市計画史的研究(一)

桐 敷	真次郎・石井	昭
一色	史彦・中井	啓之
天田	起雄・今田	栄二
大西	静代	

# 江戸・東京の都市史および都市計画史的研究(一)

## 目 次

### 第1部 天正・慶長・寛永期江戸市街地建設における景観設計

( 桐敷真次郎 )

第Ⅰ章 研究目的と方法	1
第Ⅱ章 天正期江戸城と江戸市街地	2
第Ⅲ章 文祿・慶長期の江戸市街地の景観設計	5
第Ⅳ章 寛永・承応期江戸の都市景観	8
第Ⅴ章 江戸の自然景観	9

### 第2部 東京における銭湯建築の調査研究 — 銭湯の建築様式の変遷及び分布状況など —

( 一色史彦・中井啓之・天田起雄 )

第Ⅰ章 研究目的	13
第Ⅱ章 銭湯建築の構成各部の変遷	13
第Ⅲ章 銭湯分布の規則性	15
第Ⅳ章 銭湯の建築年代と分布の推移からみた東京の住宅地化の動き	16
第Ⅴ章 資料紹介	16

### 第3部 大正・昭和期の東京下町の住宅 — 墨田区京島三丁目における長屋の調査研究 —

( 石井 昭・一色史彦・今田栄二・大西静代 )

第Ⅰ章 研究目的	25
第Ⅱ章 建築の実測図及び住まわれ方	25
第Ⅲ章 調査地区に長年在住する人との対話	28

## 図 版 目 次

### 第 1 部 天正・慶長・寛永期江戸市街地建設における景観設計

第 1 図 江戸・駿府・富士山・筑波山の地理的關係……………	3
第 2 図 江戸の初期市街化地域……………	4
第 3 図 寛永・承応期江戸市街中心部構成図……………	6

### 第 2 部 東京における銭湯建築の調査研究

図 1 東京・23 区別浴場建築年代と分布の推移……………	19
図 2～5 「明梅湯」(世田谷区池尻所在)実測図(立面・平面・断面・配置図)……………	21
図 6 「朝日湯」(渋谷区千駄ヶ谷旧在)平面図……………	24

### 第 3 部 大正・昭和期の東京下町の住宅

図 1 京島三丁目の環境……………	32
図 2 京島三丁目の旧区分……………	32
図 3 京島三丁目内建物の階数別配置図……………	33
図 4 京島三丁目内建物配置図……………	35
図 5～10 建物実測図(立面・平面・断面図)……………	37

第 1 部

天正・慶長・寛永期江戸市街地建設  
における景観設計

桐 敷 真 次 郎

第Ⅰ章 研究目的と方法

第Ⅱ章 天正期江戸城と江戸市街地

第Ⅲ章 文祿・慶長期の江戸市街地の  
景観設計

第Ⅳ章 寛永・承応期江戸の都市景観

第Ⅴ章 江戸の自然景観

# 1 章 研究目的と方法

江戸市街地の形成が、古代都城式でもなく、通例の城下町風でもなく、江戸独自の特異な形態をもっていたことはきわめて興味深い。これは、初期江戸市街地の形成が、単にありのままの自然の地形を利用するだけでなく、はじめから大規模な埋立てや開さくをとまなうものであったことに深い関係があろう。江戸は山手の自然の丘陵と下町の低平な埋立地から成立したという点に着目し、低地から丘陵地を望む景観設計の手法と江戸初期市街地形成と関連を考察してみたい。

初期の江戸の都市景観について復原的考察を行うための信頼し得る資料として、寛文10年(1670)より同13年にわたって刊行された「新板江戸大絵図」「新板江戸外絵図」計五図がある。(注1)これは明暦3年(1657)正月の江戸大火直後、正月37日に幕命により大目付北条安房守正房、新番頭渡辺半右エ門綱貞が14年間を投じて作製した江戸実測図で、洋式測量法により、五間を一分、すなわち3250分の1の縮尺で製図されている。しかし、丘陵地や高低の記入はいっさいないから、近代の地図によってこれを補わねばならない。

この目的に最もよくかなう近代の図は、参謀本部陸軍部測量局が明治17年(1884)に測量し、19年に製版、20年に出版した「東京実測図」計9図である(注2)。これは縮尺5,000分の1で、きわめて細密に描かれており、かつ幕末の市街地のおもかげを多分に残している。この明治20年図と寛文図の間の地図には、信頼すべきものはきわめて少なく、ただ街区の変遷をたどる補助的役割に用いる方が安全であろう(注3)。

明治20年図と寛文図を比較検討した結果、江戸市街地の基本的街路の配置と方位はほとんど変化していないことが認められた。試みに主要な街路をいくつか選び、寛文図と明治20年図における方位を比較してみよう。まず江戸城とその東側市街を示す「大絵図」と比較は、

表 1

街 路	寛 文 図	明治20年図	差
通町(日本橋以北)	N - 25.5° - S	N - 19.5° - S	6.0°
本町通り	E - 29.0° - S	E - 22.0° - S	7.0°
通町(日本橋以南)	E - 70.5° - S	E - 62.5° - S	8.0°
通町(京橋以南)	W - 56.5° - S	W - 49.0° - S	7.5°
桜田本郷町	E - 13.0° - S	E - 21.0° - S	8.0°
佐久間小路	W - 76.5° - S	W - 68.0° - S	8.5°

となる。寛文図の方位は単に磁北を北としているので、6.0~9.0の範囲の偏角を示しているはずであるから、実質上方位の狂いの幅はほぼ25°以下というかなり高い精度を示している(注4)。

蔵前・浅草・本所を示す「外絵図」については、該当する本所部分が明治20年図には小部分しか出ていないが、

表 2

街 路	寛 文 図	明治20年図	差
浅草橋通り	E - 70.0° - N	E - 62.5° - N	7.5°
本所松坂町	E - 95° - N	E - 3.0° - N	6.5°
本所松井町	E - 80.0° - S	E - 85.0° - S	5.0°

であって、方位の実質的な狂いの幅はやはり25°以下程度しかない。上野・本郷を含む「外絵図」でも、上野御成街道の方位は直北を向き、明治20年図ではN - 5.5° - Eで、差は5.5°となる。

結論としても、寛文図は実測図としてかなり信頼できるもので、明治20年図中にあって寛文図中のものにも対応する街路は、江戸初期以来その方位にほとんど変化がなかったといえることができる。したがって、寛文図を明治20年図に重

ね合せ、かつ寛文図以前の江戸図その他の資料を照合することによって、方位および高低について、かなり信頼できる初期江戸市街地の景観復原が可能となったことが明らかとなった。（注5）

## Ⅱ章 天正期江戸城と江戸市街地

長禄元年（1457）4月、太田道灌が築いた江戸城については、信頼すべき史料がなく、久しく不明であるとされてきた。しかし、今日では道灌の城の「中城」がのちの江戸城の本丸にほぼ相当し、道灌の「子城」「外城」は二ノ丸および三ノ丸にあたると考えられている（注6）。

つまり家康入城当時の江戸城は、のちの本丸、二ノ丸、三ノ丸、大手門内の規模と縄張りをすでにもっていたが、ただ石垣は全くといってよいほどなく、芝土居の高さ十数尺以下の土塁で囲まれ、またのちの桔梗門、大手門から平河門あたりはさらに簡易な掘上げ土居（土盛りしただけの土塁）で、その上に竹木を植えた程度だったということになる。建物のひどかったことは「靈岩夜話」、「聞見集」等に見られるとおりであったろう。

次に家康入城のころの市街地については、「天正日記」に「町かず、たて十二町、よこは三四町、所々にてさだまりなし。家かず、やけ後（あと）故たしかならず」（天正18年6月18日）とあり、城下に萱葺きの町家が百軒ばかりしかなかったことが知られるばかりで、その位置すら明確でない。しかし、重要なことはそれらが記録に止まらないほど荒廃いぢるしかつたことで、それ故ほとんど完全に新しい町割りを実施できたはずだという点である。

家康の江戸市街地は建設はきめて敏速で、8月12日に小梅の提防を修築し、溝渠1,575間を開さくし、18日に船入堀（道三堀）の譜請着手、22日橋譜請奉行の任命、8月中に江戸町奉行を天野康景から板倉勝重にかえ、9月1日には早くも本町の町割りに着手、26日にはほぼ終了、10月14日に若干の修正を行って完了している。町割の範囲は、南はのちの日本橋、北は筋違橋、西は常盤橋、東はのちの両国橋のあたりまで、これらの事業については「天正日記」「校註天正日記」「板倉家系譜外伝」「落穂集追加」「参考落穂集」「慶長見聞集」その他多数の資料がある（注7）。

「校註天正日記」天正18年9月1日の項に「本町通り、絵図仰付けらる。四十丈づつにわり可<sub>レ</sub>申旨、道はば六丈にわり、よこ町の分、四丈より三丈二丈まで所によりいろいろ」とあり、一街区40丈四方を原則として割付けられた。この割付け方については、京間か関東間かで古来議論が多いが、その問題はしばらくおき、ここでは本町通り、およびその付近の街路の方位に注目したい（第2図）。

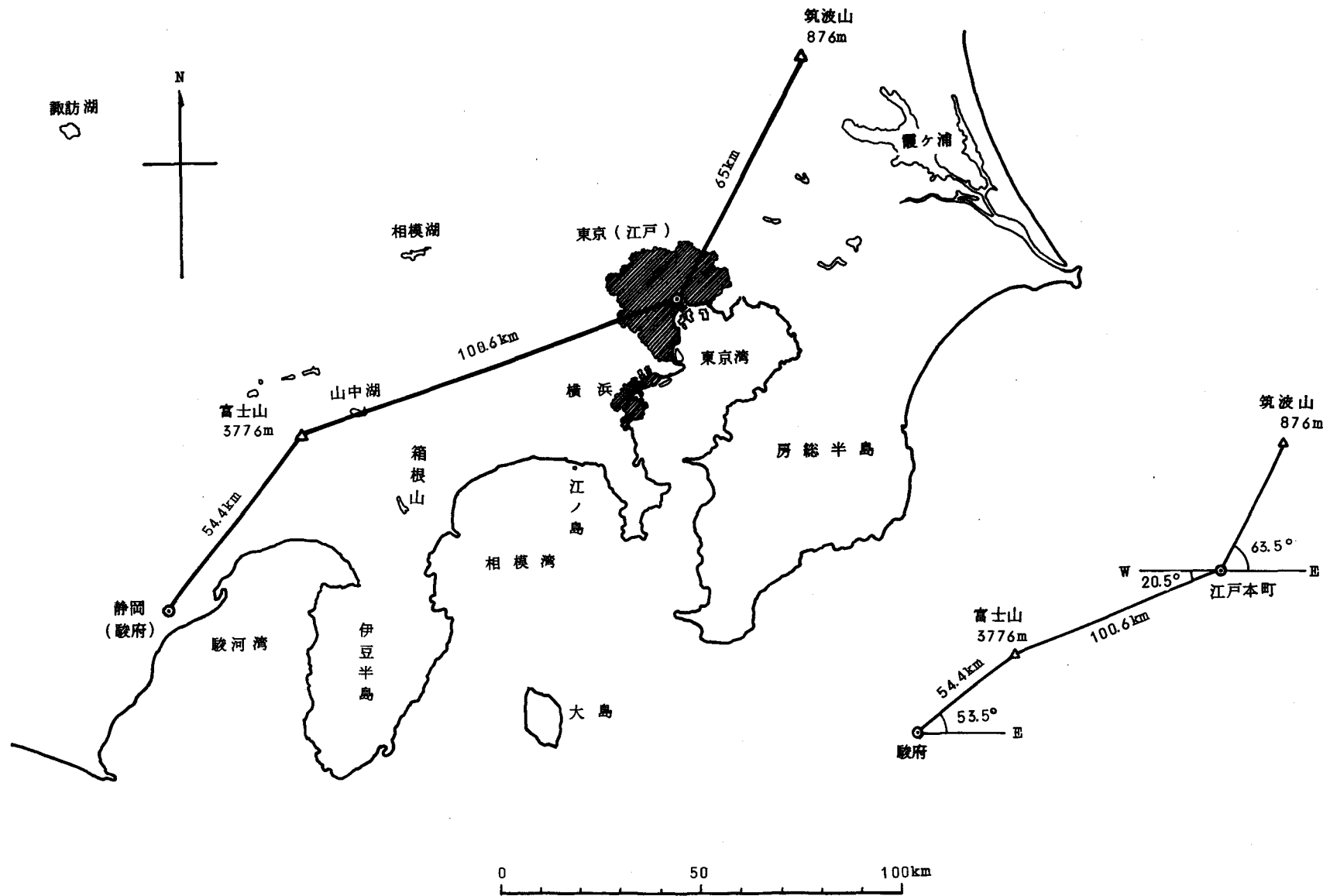


図1 江戸・駿府・富士山・筑波山の地理的關係

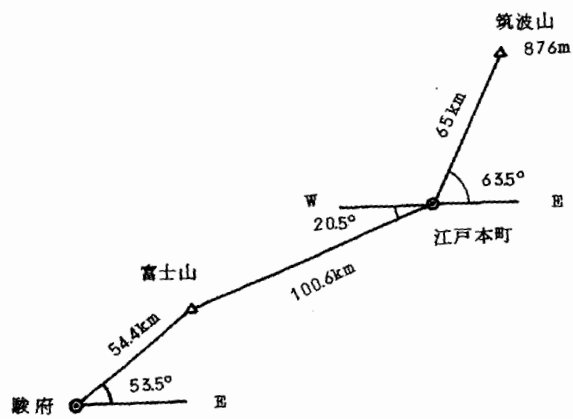
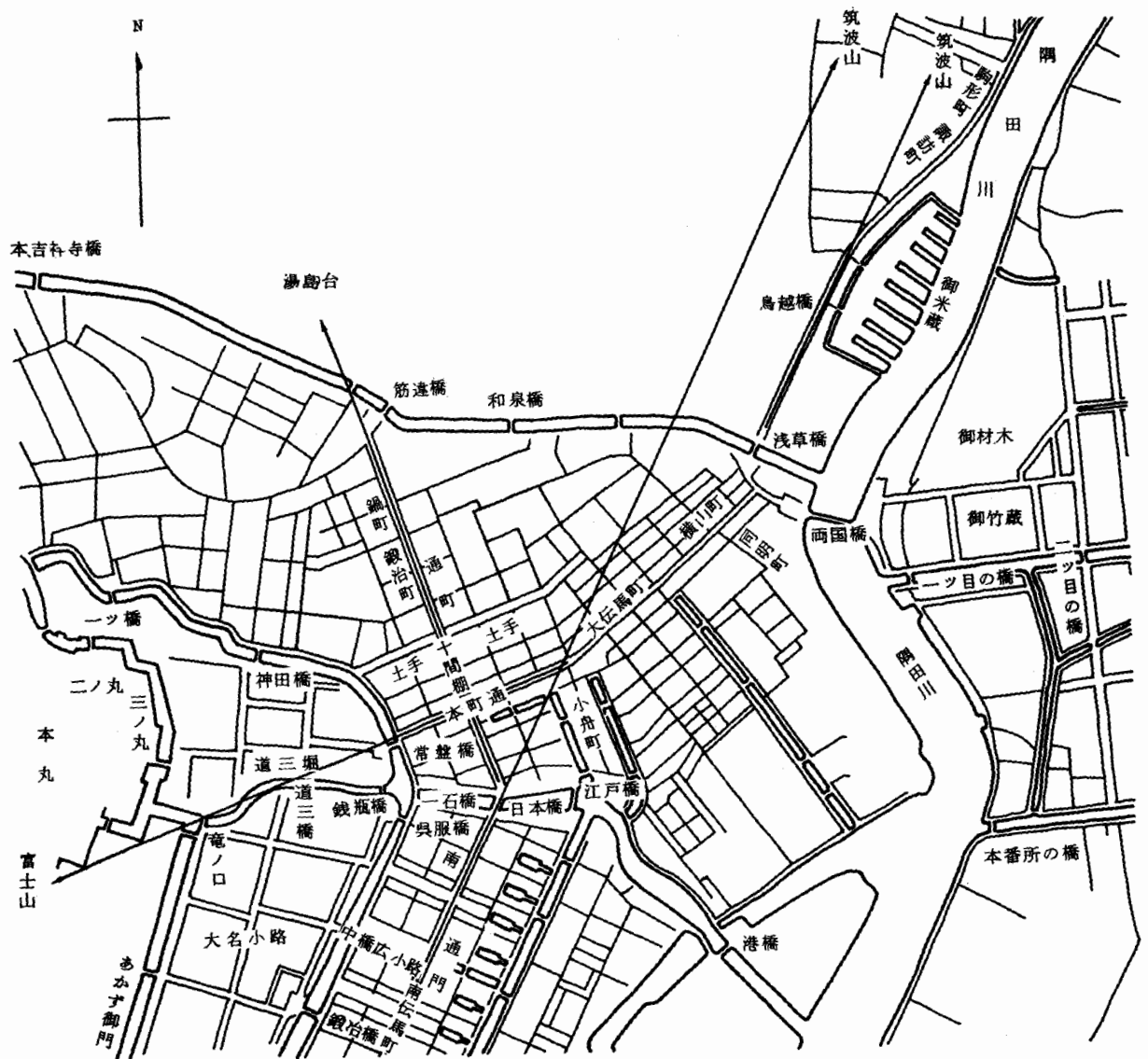


図2 江戸の初期市街化地域



本町一丁目より四丁目までの4ブロックは、各種江戸図および明治以降の測量図を通じ、ほぼ一直線で、明治20年図によれば $E-22^{\circ}-N$ である。同じく明治20年図によって、同一方向の通りの方位を調べてみると、

本町一丁目～四丁目	$E-22^{\circ}-N$
駿河町・瀬戸物町・伊勢町	$E-20^{\circ}-N$
両替町	$E-19^{\circ}-N$
本石町一丁目～四丁目	$E-22.5^{\circ}-N$
本銀町一丁目～四丁目	$E-22.5^{\circ}-N$

となっている。平均して、 $E-21^{\circ}-N$ くらいが基準方位となっているとみてよいであろう。

国土地理院二十万分の一地形図によれば、この付近より富士山頂を望む方位は $W-20.5^{\circ}-S$ 、標高1,000mの裾野を包含する視野は $W-12^{\circ}-S$ から $W-27^{\circ}-S$ にかけてであって、視野中心の方位は $W-19.5^{\circ}-S$ である。巾千丈、長さ2ブロック(約80丈)の道路の視野のフレは約 $5^{\circ}$ 強であるので、これらの道路のいずれからも富士山頂を望むことが可能である。特に駿河町は真正面に富士を望む方位をもち、この点で著名であった(注8)(第1図)。

次に通町であるが、この通りは本町通りに直交しているように見えるが、正確には $87.5^{\circ}$ の角度で交差しており、その方位は $E-70.5^{\circ}-S$ である。これは湯島台の突端、すなわちのちの神田神社の丘(標高約20m)を望む方位である。しかし、神田神社がこの丘に移ったのは元和2年(1616)で、それまでは駿河台にあり、それ以前慶長8年(1603)までは神田橋門内の旧柴崎村にあった。だから、この方が景観以外に特に意味をもっていたとすれば、その北方6町の丘陵上の湯島天満宮(標高約18m)のつづきの丘としてであろう。これは太田道灌ゆかりの神社で、文明10年(1478)に道灌が再興したと伝えられる。いずれにせよ、この方向に向う道筋がいずれも湯島・本郷の丘陵地を望んでいたことは明らかである。この通りの両端に日本橋と筋違橋が設けられることになる。(第2図)。

### Ⅲ章 文禄・慶長期の江戸市街地の景観設計

大正期に町割りされた江戸下町から筑波山頂(標高876m)を望む方位は、二十万分の一地形図によれば $E-63.5^{\circ}-N$ で南北に連峯があるため、標高400m以上の山容を含む視野は $E-59^{\circ}-N$ から $E-66.5^{\circ}-N$ に及ぶ。浅草橋門から鳥越橋(須賀橋)の間の奥州街道入口が $E-62.5^{\circ}-N$ でこの方位にあたり、この道は蔵前でいったんやや東に振れて $E-46^{\circ}-N$ となるが、諏訪町で $59^{\circ}$ に戻り、材木町でふたたび $62^{\circ}$ となる。つまり奥州街道の入口は筑波山を望む方向を基準につくられている。文禄2年以降しばらく城下の開拓に重点がおかれ、北国への通路として幅4間、長さ66間の千住大橋が架橋されたのは文禄3年(1594)9月であるから、上記の基準線は本町の町割りに次ぐ第二期の計画とみなせよう。蔵前の屈曲はこの時からあったものであろうが、それが固定されたのは元和3年(1617)7月に浅草御蔵構土手が築かれ、同6年(1620)に浅草御蔵がはじめて建てられた時であろう(注9)。

慶長5年(1600)9月の関ヶ原の勝利以後、江戸に藩邸を置こうとする大名が続出し、これにともなって新市街地の造成が必要となって、同6年3月に新しい町割りに着手した。しかし同年閏11月に大火があつて、それまでの市街地のほとんどを失っている(注10)。したがって第二期計画は、実質上慶長8年以降に延期されたのである。

慶長8年(1603)は家康が征夷大將軍になった年であり、直ちに江戸市街の拡張に着手、3月神田山を崩して外島洲崎を埋立て、浜町、日本橋、京橋、新橋、八重洲河岸、日比谷、八丁堀、木挽町附近まで造成した。「慶長見聞集」に「四方三十余町をうめさせ」、「南は品川、西はたやすの原、北は神田のはし、東は浅草まで町つづきたり」とある。この年、日本橋がはじめて架橋された(注11)。

通町の南半は、本町附近と並んで江戸下町で最も整然とした街区をもつ地区であるが、まず日本橋から京橋に至る通一丁目～四丁目、中橋広小路町、南伝馬町一丁目～四丁目の通りの方位は $E-62.5^{\circ}-N$ で、上記の奥州街道入口に平行し、筑波山の方角に向けて定めたと考えられる(第3図)。

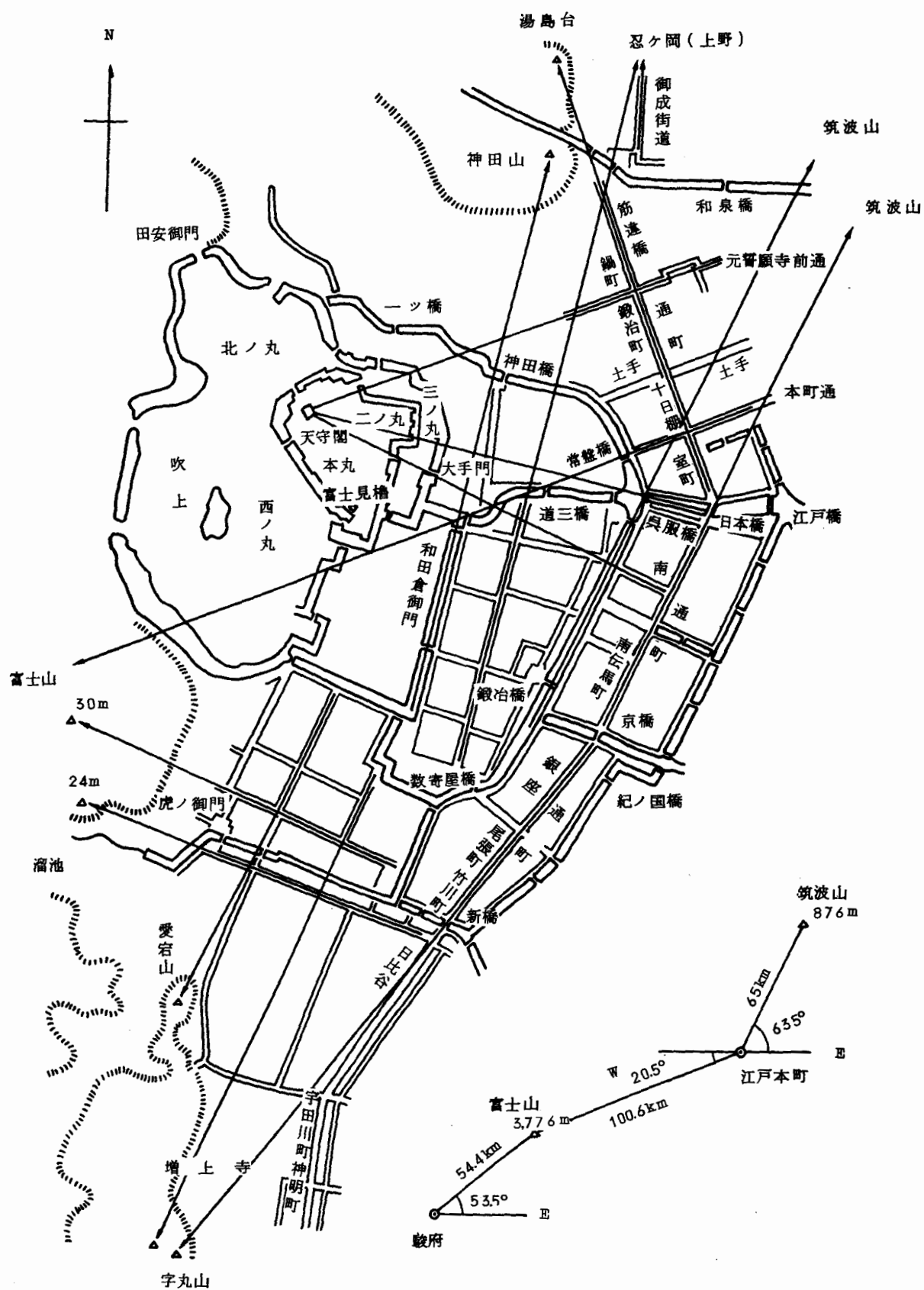


図3 寛永・承応期江戸市街中心部構成図

それに対して、京橋以南の通町、すなわちのちの銀座通りの方位は $W-49^{\circ}-S$ で、これは芝増上寺山内の南端に際立つ丸山(標高 $22.5m$ )をめざしている(注12)。また加賀町、八宮町、丸屋町の通りは同じく増上寺山内の最高地(標高 $28m$ )に向っている。すなわちこの地区の通りは、すべて増上寺の背後の丘陵を目標としており、これは、もと麩町貝塚(一ツ木)にあった増上寺を、市街地開発のため芝に移転させた(慶長3年8月、「武江年表」)ことに関係があらう。増上寺は、家康入城の時、路傍に立つ観智国師の容貌が尋常でないのを見て師弟の約を結んだ縁があり、この後慶長10年に本堂・回廊を造営して大伽藍としているし、また周知のように背面の丘には、のちに秀忠、家宣、家継、家重、家慶、家茂の墓廟がつくられることになる。

また愛宕神社も、慶長8年9月に幕府により芝桜田山に創建されたが、「慶長見聞集」に「十年以前の事かとよ。桜田山に愛宕飛給ふと風聞する。是は希代不思議哉とわれも人も此山にのぼりて見れば、草村の中にただ幣帛ばかり立置きたり」とあり、すでに慶長初年にこの山が注目されていたことを物語っている。しかし、本社、拜殿、閘門、石階等が整備されたのは慶長15年であるらしい(増訂「武江年表」)。

第二期の市街地造成はほぼ一年間で終了したことは、慶長9年(1604)2月4日、將軍秀忠が東海道、越後街道、奥羽街道に日本橋を起点として一里塚を造ることを命じ、同年5月下旬に成就していることから判る(「家忠日記追加」、「落穂集」)。

すでに慶長6年頃から大名が江戸に邸宅を構えるようになっていたが、慶長11年(1606)ころには馬場先門内、西丸下、日比谷門内、大名小路、代官町に大名邸が数十あり、特に大名小路にもっとも多く、約25邸を数えた。基準割付け決定の時期ははっきりしないが、慶長8~9年の第二期造成のときにこの区域の東辺が確定しているのであるから、ほぼこの頃とみてよいであろう。大名小路の中央南北路は上野忍ヶ岡を目標としており、比較的目立たない忍ヶ岡もこの頃から注目されてくるようである。(第3図)

江戸城中心部の結構は、天正20年(1592)より文禄2年(1593)までに本丸、西丸の縄張りがきまり、慶長9年(1604)から同12年(1607)9月の天主閣竣工でおよその形をなし、同16年(1611)は西ノ丸の修築、同19年(1614)は主として石垣の修築が行われた。したがって、慶長末年に本町通りから常盤橋際に出れば、富士山頂は富士見櫓( $W-12^{\circ}-S$ )の左 $8.5^{\circ}$ 、桜田見櫓( $W-18^{\circ}-S$ )の左 $2.5^{\circ}$ 、西ノ丸伏見櫓( $W-20^{\circ}-S$ )の上あたりに見えた筈である。天守台の方位は $W-8^{\circ}-N$ で、西ノ丸南端から本丸北端の梅林櫓まで含む視野は $W-28^{\circ}-S$ から $W-14^{\circ}-N$ までとなる(第3図)。

天守を真正面に見ることのできる通りは、通三丁目から数寄屋町と櫓物町の間を抜ける通りと、神田蠟燭町から富山町を経て富松町に突当る筋道(元誓願寺前通り)と、一石橋と日本橋の間の日本橋川の水路である。これらはいずれも天守を望む方位であることを意識して調整されたらしい形跡がある。たとえば日本橋川の水路は水上からの江戸城への入口であり、日本橋上から天守を望む方位( $E-15^{\circ}-S$ )でその南岸を定めている。また元誓願寺通りは、寛永9年「武州豊島郡江戸庄図」に見られるごとく、町人地ではなく、武家地と寺町を区切る通りであった。また数寄屋町と櫓物町の間、寛文10年「江戸大絵図」によれば、わざわざ方40丈の区画を破り、またすぐ南に中橋広小路が設けられているにもかかわらず、幅約20間の広小路をつくっている。さらに上記寛永9年図を見ると、この附近の通町西側の街区に限り、ブロック内の空地が西側に開放されているものが多い(第2図)。寛文図では南大工町も広小路となっている。これらの広小路は江戸城本丸・西ノ丸の景観を展望しており、多くの櫓や紅葉山や吹上望遠台(標高 $32.4m$ )なども当然考慮されていたよう。

慶長12年に成った天守閣の大きさは正確にはわからないが、慶長11年に高さ8間に集いた天守台を高さ10間、広さ20間にし(「当代記」)、その上に五層の天守を建てている。問題は天守台の高さで、寛永時の天守台は高さ5間半(「吹塵録」)、6間(村井益男説)、7間(内藤昌説)と諸説あるが、広さは約20間に18間で慶長時とほぼ同じだから、台上の建物の高さは寛永時とさして変らなかったであろう(注13)。

したがって、建物部分の高さを寛永時天守に準じ22間5尺(「吹塵録」)とすれば、148尺すなわち $44.8m$ 、慶長12年の石垣高さ京間10間を加えて213尺すなわち $64.5m$ 、標高 $20.4m$ の台地に立つから、天主閣大棟までの高さは標高 $84.9m$ となる(注14)。

常盤橋附近の標高は $3.4m$ 、通一丁目の標高 $3.9m$ であり、天守閣までの距離は常盤橋から $1.470m$ 、日本橋上からは $1.880m$ である。したがって、常盤橋から天守頂上を仰ぐ角度はほぼ $3^{\circ}10'$ 、日本橋下の河上からの仰角は $2^{\circ}35'$

橋中央は橋たもとより4 m高かったとして日本橋橋上からの仰角は $2^{\circ}21'$ となる(注15)。

この附近から富士山までの距離は100.6 Km、地表面の弯曲を考慮に入れた富士山頂の仰角は $1^{\circ}42'$ であるから、江戸城天主閣は、常盤橋では富士よりも8割6分も高く、日本橋下でも5割、日本橋上でも4割弱高く見えたことになる(注16)。

#### Ⅳ章 寛永・承応期江戸の都市景観

寛永年間でまず注目すべきことは藤堂家による東叡山寛永寺の建立であろう。これは寛永元年(1624)のことで開山は慈眼大師であり、寛永3年には神祖御宮を建立し、仁王門、常行堂、法花堂、経堂、多宝塔等が建てられて諸堂成就したのは寛永4年(1627)である。上野の山、忍ヶ岡は、天正期はもちろん、文禄・慶長期にはまだ比較的重要性が少ない。これはやや距離がある割に丘谷に特色がなく、また増上寺や愛宕山のように特に名所として注目されることがなかったためであろう。

しかし寛永年間に入って寛永寺ができてからは、8年に土製の丈六の大仏、清水観音堂、一丈八尺余の大石燈籠をつくり、また寛永年中に不忍池をビワ湖に見立て、不忍井才天を竹生島に模して基立するというような名所化が行われた(「武江年表」)。こうして、上野のかなり意識的な名所化とともに、筋違橋から上野に達するいわゆる下谷御成街道(お成道)が形成されるが、ここではもはや初期の直線通景道路でなく、矩折道路になっている。しかし全長約1 Kmの直線部分は明らかに上野の山、特に寛永寺仁王門をめざしてつくられている(第3図)。

寛永6年(1629)にはじまる江戸城の工事は、御三家、譜代、外様の大名六十八家、そのほか三河、遠江、伊勢、播磨、備後、近江、美濃、五畿内の衆など小身の者まで動員し、役高総計342万石、石垣工事延べ1,750間、4,453坪、大手門、玄関前石垣、吹上口および山里枋形、紅葉山東照宮枋形、月見櫓台裏門枋形、芝口および日比谷門枋形、数寄屋橋、鍛冶橋、呉服橋、神田橋、一ツ橋、雉子橋の諸門を含んだ。

次いで寛永12年(1635)、二ノ丸を拡張し三ノ丸をせばめる工事を6月に完成し、翌13年正月、外郭全体にわたる著名な外堀石垣工事が開始された。この時の大名の役高は664万5千石、赤坂より四ッ谷、市ヶ谷、牛込にわたる外堀ができ、神田川に接続され、また東側も神田橋、常盤橋、呉服橋、鍛冶橋、幸橋、虎ノ門、赤坂溜池にわたる堀と石垣が整備された。以上の工事は7月に終り、11月には西ノ丸殿舎が落成して、江戸城はほぼ完成する。

しかし、寛永14年(1637)に至って天主閣の修築があった。この時の工事は、慶長12年の天主閣を完全に解体し、天守台から築き直し、建て直すものであったことは明らかで、天守台は福岡・秋月の黒田家、広島・三次の浅野家、天守一重目は福山の水野、二重目は淀の永井、三重目は岸和田の松井、四重目は笹山の松平、五重目は長岡の永井家が担当している(注17)。天主台は慶長のものより低くされたことは明かだが、かりに内藤昌氏のとなえるように、高さ7間であったとすれば(注18)、天主閣高さは19.35尺、すなわち5.86 m、標高79.0 mとなり、常盤橋際、日本橋下、日本橋上からの仰角は、それぞれ $2^{\circ}58'$ 、 $2^{\circ}24'$ 、 $2^{\circ}91'$ となり、江戸城天主閣は常盤橋際では富士より7割4分高く、日本橋下では4割、日本橋上では3割高く見えたことになる。

寛永16年(1639)8月に本丸殿舎が焼け、翌17年に再建されているから、寛永17年(1640)をもって初期江戸城の完成とみるのが適当であろう。その後、承応2年(1653)にふたたび天主台の修築があって、この時天主台はさらに低められ、「吹塵録」記載の「高五間半外狭間石三尺」となったと考えられる。これは注13に記したように野面積5間半の上に狭間を設けた切石積3尺を加えたものと解せられ、天主台高さは38.75尺、天主閣総高は186.75尺、すなわち56.6 m、標高77.0 mとなり、前述三地点よりの仰角はそれぞれ $2^{\circ}52'$ 、 $2^{\circ}21'$ 、 $2^{\circ}06'$ となり、富士との比較すれば、それぞれ約7割高、4割高、2割3分高となる。

これ以後、万治2年(1659)のお茶の水疎水工事のほか、幕末まで基本的な形態を変えてしまうような工事はないのであるから、寛永15年から承応2年までの15年間および承応3年から明暦3年(1657)正月の大火までの3年間ほどが、初期江戸の完成した景観が見られた時代となる。

しかし、すでに見てきたように、本論文の目的とする初期江戸市街地の景観設計の基本は、すでに天正18年(1590)から慶長12年(1607)の間に形成されているとみてよい。なぜなら、寛永期の工事は、一言でいえば江戸城外郭の

石垣工事と城郭全体の整備および美化であって、江戸城大手側の縄張りや規模を基本的に変更するものでなく、また天守閣、諸櫓、諸門の位置や規模を根本的に変更するものでもなかったからである。むしろ天守閣の高さが漸減されたり、新しい街路の敷設には目標がないものが自然多くなり、初期の景観設計の意図が次第に稀薄になってゆくことがわかる。明暦大火後、天守閣がついに再建されなかったことは、こうした変化を端的に物語っている（注19）。

## V章 江戸の自然景観

江戸の自然景観は京都に較べるとほとんど取るに足らないものと思われがちである。江戸の自然景観を特に論じたものは近世にも比較的乏しく、ことに近代に入っては、武蔵野の美を除いてはあまり問題にされていないから、ほとんど市民の意識にのぼらないのも無理でない。

しかし、古くは文明8年（1476）の簗庵竜統（しょうあんりゅうとう）の「江亭記」に、

「西望すればすなわち原野を逾（こ）えて雪嶺天を界し、三万丈白玉の屏風の如きもの。東視すればすなわち城落を阻（へだ）てて瀛海（えいかい）天を蘸（ひた）し、三万頃（けい）の碧瑠璃の田のごときもの……」

とあり、西の富士、東の江戸湾が最も目立つ眺望であったことがわかる。いわゆる「含雪泊船」である。村庵靈彦は「吾老いて期すること無し泊船の処。関心す西嶺の雪堆（せつたい）を成すを」といい、雪樵景菴（せつしょうけいあん）は、（風帆多少詩を載せて去り。雪を吹く士峰は晴れて江に墮つ）とうたい、村庵靈彦の跋には、

「凡そ関左に遊ぶ者は、必ず以て富士の山を見、武蔵野を過（よぎ）り、隅田河を渡り、筑波山に登る。則ち皆四方観遊の美を誇るなり」

「若しそれ軒に憑（よ）って燕坐し、四面を回瞻（かいせん）すれば、則ち西北に富士山有り、武蔵野有り、東南に隅田川有り、筑波山有り」

とあり（注20）、さらに建長寺百五十九世湘山暮樵得公の「左金吾源大夫江亭記」にあげられている見所として、品川の流、平川の長堤、浅草の浜などがある（注21）。

文禄二年、藤原惺窩（せいご）ははじめて江戸に下り、この時の印象を「四景我有<sub>レ</sub>解」という文にしたが、この四景とは「士峯武野、隅田、筑波を云う」と「増訂武江年表」は注記している。

しかし、これらは主として江戸城よりの眺めであって、低地よりの眺望は入っていない。富士、武蔵野、隅田、筑波に次ぐ江戸の景観要素は何であったろうか。江戸湾に臨む低地から見た丘陵地以外にはない。すなわち、めばしいものとして、

北	神田山	22m
	湯島台	22m
	本郷台	24m
	忍ヶ両	17m
西	本丸台地	20m
	永田町台地	24m
	愛宕山	26m
	芝増上寺裏山	28m
	芝丸山	22.5m

等があるのみである。これらはいずれも下町町人地より600mないし2Kmの距離にあるので、その仰角はおよそ30°から3°前後にわたる。

つまり20m強の丘は、600mの距離からは富士山よりやや高く、2Kmの距離からも筑波山よりやや高く見えるのであって、景観の目標としては十分に富士・筑波と並び得る。それゆえ、富士・筑波を含め約十個の目標が得られたことになり、これらを「アイ・ストップ」として街路を配置することはかなり自然なことといえよう（注22）。

ちなみに「慶長見聞集」には、慶長10年より12年の江戸城増築後の光景を一括して描いているが、そのなかに現われ注目すべき景観を列举すると、

江戸湾、武蔵野、隅田川、御城、浅草観音、湯島天神、神田明神、山王権現(城内)、桜田山の愛宕、増上寺、桜田の桜、清水門の夏富士、紅葉山の紅葉

などがあげられ、本論中にあげられた諸目標の選択がけっして偶然でないことが知られよう(注23)。

(注1) 寛文図五図は、古板江戸図集成刊行会編「古板江戸図集成」巻三、中央公論美術出版、昭和38年に収録されている。なお、寛文図の複製としては、「寛文五牧図」芳賀書店、昭和45年がある。

芳賀書店版「寛文五牧図」には、五牧図の原図と目される「万治年間江戸測量図」が添附されている。これらに関する筆者の測量学的考察は別稿にゆずりたい。

(注2) 明治20年図九図は、日本地図選集刊行委員会編「明治中初五十分ノ一『東京実測図復原』」、人文社、昭和42年で複製されている。九図をバラにしたものと、九枚を張合せ裏打ちしたものと二種がある。

(注3) これらのうち、比較的信頼し得るものとして、明治十一年六月内務省地理局地誌課が製作した「実測東京全図」をあげておくべきであろう。これは吉田晋および赤松範静が製図し、塚本明毅が監修、河田巖が校正したもので、一町を二分、すなわち縮尺18,000分の1、かなり周辺部まで示されている点が特色である。この図は芝区柴井町松井忠兵衛方から発行され、明治12年十月校補されている。人文社の復刻版がある。この図はかなり信頼のおける地図で、年代も幕末に近いが、残念ながら縮尺が大きすぎる。縮尺がより寛文図に近く、表示が最も精細であるという理由で明治20年図を選んだ。20年図は、日比谷図書館には11年版、12年版の両方が所蔵されている。

(注4) 磁北すなわち磁石のさす北は、地図上の真北方向と一致しない。日本では磁北は真北に対し6°から9°西に偏している。小川泉「地図編集および製図」、山海堂、昭和41年、P6 ちなみに1950年観測の偏角は、宇都宮6°30' W、銚子6°04'、三鷹6°09'である。東京天文台編「理科年表」、丸善、昭和38年。寛文図の道路方位の測定には、中央公論美術出版版のインデックス地図を用いた。原図は大きすぎ、かつ方位線がないが、このインデックス地図には白線の区画が入っていて計測に便利だからである。

(注5) もちろん二百余年の間に、江戸の丘陵地と平地との標高差には若干の変化が生じたかも知れない。寛文図には高さ方向の表示がないから、この点を決定的に論ずることはできない。しかし、考え得ることはまず埋立地域の地盤沈下で、これは沈下した分だけ土砂を補足しなければ市街地そのものが成立たないのであるから、常に少なくとも海拔2~3mという最低限の標高は保っていたはずである。次に丘陵地の侵食であるが、江戸の丘陵地は高くもなく急峻でもなく、かつ早くから記念的建造物が建てられて基準面を確定し、樹生や植樹も豊かであったのだから、大きな土砂崩れや施設の大改造が記録されない以上、それほど大きな低平化があったとは考えられない。本論文で後述する標高差の問題は、近代の標高差よりも江戸初期の標高差の方がやや大である可能性が大きく、したがって常にいわゆる安全側で論じられていることになるが、それにしても大きな差はないと考えられる。

(注6) 前島康彦「太田道灌」太田道灌公事蹟顕彰会、昭和31年。菊地山哉「五百年前の東京」東京史談会、昭和31年。千代田区役所「千代田区史・上」昭和35年。

(注7) 「天正日記」については、田中義成、渡辺世祐両博士以来の偽書説があり、「家忠日記」と一致しない点は、偽作・改変された疑いがあるという。特に日付が最も信用しがたいとされるが、ここで取りあげた事実の前後関係や内容については特に矛盾はない。

(注8) 駿河町の富士は、「江戸名所図会」天枢之部巻一の挿図(角川文庫版(-)PP.64~65)をはじめ、しばしば版画の画材とされている。明治20年図による駿河町街路の方位20°は付近の平行する街路のうち最も富士山の方位20.5°に近く、かつ富士山の標高1,000mの裾野の視野中心の方位19.5°にも最も近い。したがって、裾野上部を含む富士の景観を展望するのに最もよい方位となる。

(第9) 「増訂武江年表」の元和3年の項に、朝倉無声の補として「七月、浅草御蔵構土手を築く」とあり、元和6年の項に「浅草御蔵始めて建つ」とある。

(注10) 慶長6年の町割の内容は不明である。「天正日記断簡」にも「江戸町わりはじめ、きもいりの内へ平右エ門申

付る」とあるのみ。同年11月の大火については「慶長見聞集」に「此火焼亡に江戸町一宇ものこらず」とある。

(注11) 著名な千石夫による開発工事で、「当代記」その他多数の資料があるが、実際の工事の内容そのものはあまり明らかでない。比較的明確な記事として、「細川系譜家伝録」に「慶長八年江戸において運漕の水路を開く」とあり、これに「慶長見聞集」等の記事を合せて判断して、「東京地理志料」は工事の範囲を、浅草の南辺、内神田、浜町、八丁堀、日本橋より新橋、芝口、日比谷、西丸下曲輪と推定し、「東京地理沿革考」もこれに準じている。「東京市史稿市街篇」第二では、さらに江戸絵図の変化を比較勘考して、工事の範囲を、京橋新橋間、日本橋通り、日本橋川、新江戸湊、入堀として小舟町、堀江町の入堀、日本橋川南岸は楓川を通じ、楓川より每一町の間隔で長さ一丁半の入堀を設け、中橋大入堀を西の方外濠に達せしめたとしている。しかし、寛永9年図や寛文図では中橋大入堀は日本橋通りまで止まっている。

(注12) 丸山は、明治20年図には字丸山と記載されている。これは、実は長径110mに達する前方後円の後円部にあたり、明治32年(1899)に坪井正五郎博士が調査している。この大古墳と10個の小古墳が台徳院霊廟を囲む形で東照宮背面の台地に輪をなしている。「港区史上巻」昭和35年、PP 380~384。

(注13) 天守台高さについては諸説あり、明らかに誤りと見られるものも多いが、決定も容易でない。「吹塵録」の記事は数値が最も詳細であり、かつ後書に「右、正徳二年壬辰(1712)正月13日御沙汰に付取調、大久保隠岐守殿江小普請奉行竹田丹後守ヨリ進達書付中ニ見ユ」とあるので、寛永時天守の数値としてかなり信頼できるものと考えられる。天守台石垣にして、南北20間1尺4寸、東西18間1尺、「高五間半外狭間石三尺」とある。総高として「地形ヨリ箱棟上迄二十八間五尺程」とし、別に「御天守石垣上ヨリ箱棟迄、二十二間五尺」とあるから、石垣高さは、187尺ほどから148尺を引いた39尺ほどでなければならない。京間五間半は35.75尺であるから、この石垣の実高は五間半でなく、これに3尺を加えた38.75尺であつたはずで、これが39尺ほどにあたり、「程」の文字が用いられている理由であろう。間でいえば京間5.96間強(5間6尺2寸5分)であり、約6間というのが正解ではあるまいか。少くとも承応2年の天主台は約6間でよいと考える。

(注14) 本丸台地の天守台の標高を記入した地図は少ない。前記明治20年図にも記入はない。信頼し得るものとして、内務省地理局が明治18年に作製し、明治20年の出版した「東京実測図」5,000分の一の第二幀に、天主台の北辺すぐ近くに67.3尺(20.4m)の記入がある。他の補助資料として、前記参謀本部明治20年図に、本丸北端20.2m、正午号砲台付近で18.9m、富士見櫓下で19.2m、富士見櫓脇の小山で21.9mの記入がある。なお明治42年の「東京市各区高低表」に「本丸天主台跡」として98.0尺があり(「東京市史稿・市街篇第一」PP 35~41)、これは現存する天主台遺構の上をとったものとみられるが、天主台中央の凹部でとったか、石垣上端でとったかわからないので、一応保留し、なお検討してみたい。本論では、上記20.4mをとるが、約20mとみても、大過ないと思う。

(注15) 初歩的な正切の計算による。仰角についてどの程度の数値を出せば適当かは、眼の解像力にも関係がある。田村稔氏は、星を見分け得る最小角として60秒をあげ、平行線チャートの場合は50秒、二本のクモの糸の場は2分28秒をあげている(「カメラ毎日」写真教室[18]、1970年11月号)。著名な「ライカ・マニュアル」では、10インチの距離に対して100分の一インチ、すなわち30分の一度、すなわち2分としている(Willard D. Morgan: Laica Manual and Data Book, 14th ed., New York, 1962)。したがって、景観問題を扱う場合、分以下は無意味であり、といって度単位では粗すぎる。実用的には5分きざみか、10分きざみが適当であろう。

(注16) 地表のママを考慮した富士山の仰角の略算は以下のように行った。地球半径を6370Kmとすれば、地表面距離100.6Kmに対する中心角は54'となる。これから江戸における地表面の切線と、江戸と富士山底面とを結ぶ弦とのなす角は27'、したがって江戸から見た場合、水平線下にかくれる高さは $100.6\text{ Km} \times \tan 27' = 0.788\text{ Km}$ 。ゆえに富士山は $3776\text{ m} - 788\text{ m} = 2988\text{ m}$ の上部だけ見えることになる。江戸で標高3mの地点から富士山頂を見上げる仰角 $\alpha$ は、 $\tan \alpha = \frac{2985}{100600} = 0.0297$ 、ゆえに $\alpha = 1^\circ 42'$ となる。同様にして筑波山の仰角は29'と出る。

(注17) 既出「千代田区史・上」に各期工事分担一覧表がある。

(注18) 内藤昌「江戸と江戸城」鹿島研究所出版会、昭和41年。内藤氏は当時の図面にもとづき、最も信頼し得る数字として7間をあげ、その根拠は甲良家本としている。小野清・高柳金芳「史料江戸幕府の制度」人物往来社、昭和43年の附録に、紅葉山文庫所蔵資料による「江戸城天守矢倉建図」があり、「石垣工事高サ六間」「御天守石垣高サ六間」とした図があるほか、「幕府大棟梁甲良氏本」正面建地割と題する別図に「石垣高サ立水ニテ京間七間」とある。

(注19) 都市が発展し稠密になるに従って、当初の市街そのものが基準となり、第二段階の都市形成に入るのは、ある程度当然の変化であるが、このような変化が、造形意識の変化にも密接に対応しているとすればはなはだ興味深い。すなわち慶長期は安土桃山時代の美意識の発展が最も完成した時期と考えられ、建築・造庭の最盛期と思われるので、その都庭設計への反映はむしろ当然とみなされるからである。このような活気ある造形意識は、建築や造庭においてもほぼ寛永期までしかつづかない。

(注20) 「江戸名所図会」天枢之部巻一に全文掲載されている。鈴木棠三、朝倉治彦校註による角川文庫版では(－) PP・43～49。

(注21) 同上、角川文庫版では(－) PP・49～51。

(注22) 「アイ・ストップ eye-stop」とは、近年都市景観の研究に用いられはじめた言葉で、道路によって切り開かれた背景の空隙をふさぐ建造物や自然物をいう。これはジッテの都市造形理論にもとづく発想で、広場や街路の造形の要点は、周囲の景観が視覚的に断れ目なく連続して人間をとり囲むように計画することにあることを意味する。

(注23) 北島正元教授の示唆されるところによれば、本論で示したような都市形成法は、当時の軍学者あるいは地方(じかた)の技術に関連しているかもしれないという。当時の軍学はいわゆる甲州流軍学で、これは北条・山鹿流軍学の源流となる。上記寛文実測図は、西洋測量術を導入しているが、北条安房守の手になるものであり、技術者の系統を示すものとして興味深い。また家康の地方巧者であった伊奈忠次(1550-1610)は検地・水利の技術家であり、当然測量術に通じていたにちがいない、いわゆる伊奈流にも類似の技巧があったものと考えられる。山獄丘陵を縄張りに利用することは、測量機器が未発達時代にはきわめて簡便で実用的であったにちがいない、その有効性ははなはだ兵法的である。これらの技術史的考察については改めて考究したいと思う。(以上)



## 第 2 部

### 東京における銭湯建築の調査研究

—銭湯の建築様式の変遷及び分布状況など—

共同研究者 一色史彦

中井啓之

天田起雄

(現在奈良国立文化財研究所)

#### 第Ⅰ章 研究目的

#### 第Ⅱ章 銭湯建築の構成各部の変遷

#### 第Ⅲ章 銭湯分布の規則性

#### 第Ⅳ章 銭湯の建築年代と分布の推移

からみた、東京の住宅地化の

動き

#### 第Ⅴ章 資料紹介

## I 章 研究目的

風呂屋・湯屋・銭湯・公衆浴場、これらの言葉の意味は、現行の国語辞典類でもそうである様に、特に区別される事はない。けれども用語の変遷にはそれぞれ史的背景があり、この場合には特に建築様式の変遷にも関わりを持っている。風呂屋と湯屋の違いは、蒸し風呂と浴場の差にある。浴場といっても江戸時代の初期までは湯の量は極く少なく、腰湯程度であった様なので、発汗を促すには室内の温度を高める為の設備として、湯気が持つエネルギー確保の為の密閉した空間を必要とする。この点では両者とも同様なので、江戸時代中期以降になって半蒸半浴湯の「戸棚風呂」が工夫され普及すると両者の呼称上の区別もなくなる。その後は、江戸幕府、明治政府の発する令文には、「湯屋」が用いられているが「浴湯」と公称されるのは大正9年以降である。「銭湯」の初見は室町時代の事であって、それは共同生活の入浴習俗や仏寺に於ける施浴の習慣が一般的であった様だ。本論文で扱かうのは、現在の建築を主体としているので、いわば、公衆浴場時代の銭湯建築である。

低平なスカイラインを持つ現在の東京では銭湯建築は人目をひく都市景観要素の一つである。それが我々の日常生活とあまりに密着している為に、特に意識される事は少いかも知れない。城郭建築を思わせる様な堂々たる屋根と白壁、住宅の低い屋根の上や高層ビルの間から見える温泉マーク入りの煙突。気付いてみるとこれらの要素は周囲の建築とは大いに異っている筈である。また、銭湯に行った人は、首切にヒヤリと水滴を受けた経験を持つ。これは異様に高い浴室の天井が、湯気を結露させる為である。さらには浴室を飾るタイルやベンキで画かれた背景画。こうした要素は、現在ではどの銭湯建築にも共通したものである。それはどの様にして形成されたのであろうか。

銭湯は「公衆」を対象とするが故に問題は都市に直結する。江戸時代から現在迄為政者を悩ませるのは、適正配置と入浴料金、衛生設備関係の問題であった。事情が変わった点としては、江戸時代に於ける防火対策・風俗問題に対する現在の都市公害問題がある。

また、銭湯の分布状態は住宅事情を反映する。浴室を持たない共同住宅の増減、新興住宅地開発の状態等も銭湯の年次建設状況から知る事ができるのである。

## II 章 銭湯建築の構成各部の変遷

一般的な銭湯建築は平面的にも立面的にも 1) 入口と脱衣場 2) 浴室 3) 釜焚・煙突と居住室、の三部構成で成り立っている。暖簾をくぐると、下足脱の土間、板敷の脱衣場、タイル張りの浴室、壁を隔てて釜焚場と居住室、戸外に煙突が立つという平面構成は、入浴という機能を忠実に建築化しし無駄のないものである。

### 1) 入口と脱衣場の意匠の変遷

ここは銭湯建築を最も強く印象づける部分であり多種多様な意匠がみられる。日本建築の大きな見所の一つは屋根構成の多様性にある。城郭建築や神社建築はその代表的なものであり、入母屋造・切妻造・千鳥破風・唐破風・軒唐破風を応用した銭湯建築の表部分はそれらとの意匠的つながりを思わせる。外壁を白漆喰塗りし破風板の下に懸魚をつけた銭湯は特に城郭建築に類似する。銭湯関係者はこれを「宮造り」とか「御殿造り」と称する。この様に銭湯建築の外観意匠が立派なものになるのはいつ頃からであろうか。建築意匠にも厳しい身分制を反映していた江戸時代には、銭湯の外部にまで唐破風屋根が作られていたか疑問である。それを証する資料を知らないが、現在の京都に見られる銭湯は東京のものに比して目立たない意匠が多い。関係者の話では、銭湯の外観が派手なものになったのは、関東大震災後の事であり、第二次大戦後は外観よりもむしろ内部の改良に重点がおかれたという。これに関しては、建主の資金力も考慮に入れねばならないが、現存するものをみるとそこには明らかに意匠の変遷が認められる。後述する様に、大震災前の銭湯の残存例はあまり多くはないが、それらは入口が入母屋で脱衣場部分は切妻造というファサードの意匠としては最も簡単な部類に属する。意匠的に優れたものが多く現われるのは、大正末期から昭和10年代である。唐破風、軒唐破風を用い、入母屋の妻は木連格子に懸魚や擬った彫物をつけるなど、堂々とした書院造風の外観を持つ銭湯が数棟ある。

それに対して、現在では城郭風に外壁を全て白壁とするものが多い。これは昭和25年に制定された建築基準法の影響と思われる。市街地で建築線一杯に建てるには鉄筋コンクリート造にするか、木造の場合には外壁にラスモルタルを塗り防火建築にしなければならなくなった。どちらの場合も白ペンキで塗装するので城の白漆喰壁によく似た外観を呈することになる。要するに戦前の銭湯建築のファサードは書院造風であり、戦後のそれは城郭建築風であると言える。現在木造のものもかなり残っているのは、隣家との境に高さ2m以上のブロック塀を設ければ木造のままでよいという便法が与えられたからであるが、それも改築までの事であるからいずれ書院造風銭湯は姿を消すであろう。

外からみると脱衣場の屋根を相当高くする銭湯が多い。中には勾欄をつけて二階建ての様にみせているものもある(図2参照)。これは所謂「銭湯二階座敷」の名残りであろう。元禄10年の禁令に「二階座敷を構候儀遊処に紛敷相聞へ候、二階座敷可<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>無用<sub>一</sub>候」とある様に、入浴後の手軽な休憩所として庶民の間で大いに利用され、数度に亘る政府による禁止令が出されたにもかかわらず明治中期まで存続したが、後述の柵榴口の改良と共に姿を消す。これも銭湯建築の外観の変化の一つである。現在ではここを貸アパートや物置にしている例もある。

## 2) 浴室部分

ここでは先ず柵榴口の改良の問題から始めねばならない。これが浴室部分の変化、延いては銭湯建築の変化を促したのだから。

はじめに述べたように、室内の温度を高める為に戸棚風呂を工夫したのだが、これは出入の際に戸を開閉するので多人数の入浴には向かない。そこで銭湯用に考え出されたのが柵榴口である。「江戸繁昌記」はその構造を次の様に説明する。  
「…湯槽広方九尺。下有<sub>二</sub>竈<sub>一</sub>。…室前面塗以<sub>二</sub>丹<sub>一</sub>。…半上<sub>二</sub>隔<sub>一</sub>之。半下定<sub>レ</sub>之。客從<sub>二</sub>空所<sub>一</sub>俯入。此謂<sub>二</sub>柵榴口<sub>一</sub>。…隔<sub>レ</sub>戸。書以<sub>二</sub>雲物花鳥<sub>一</sub>。常鎖不<sub>レ</sub>啓。蓋蓄<sub>二</sub>湯氣<sub>一</sub>也。…」  
由みに、こうした構造を柵榴口というのは、湯槽に入るのに客が身をかがめることと、昔時鏡を磨くのに柵榴の実からとった酸を用いたことと結びつけた呼称ともいう。この構造は、湯槽が狭くて暗いため不衛生になりやすく、風紀上も異国人の好奇心をそそることなどもあって、当時欧化政策路線を走っていた明治政府にとって柵榴口の改良は緊急の課題であった様だが、漸やく明治10年になって神田連雀町で、湯槽を流板と平坦になる様に改造した改良風呂が評判をとった。これは温泉地の浴室形式を取り入れたものである。明治12年になると東京府下に「湯屋取締規則」が判定されて、正式に柵榴口の廃止が定まったのだが、一挙に柵榴口が姿を消した訳ではなく、明治末期になっても東京の一部には残っていたという。これには後述する様に、熱エネルギー源の変化を考慮に入れる必要があろう。要するにこの頃になって湯気をふんだんに使える様になったのである。柵榴口が撤廃されたお陰で人々は広い浴室での入浴を楽しむようになったのである。現在の浴室の天井の高さは7.5m程もある事が結露現象の原因となっている。関係法令は「浴室には、その床面積の1/40以上の面積を有する湯気抜きのための開口部を設けること、を定めているが、天井の高さについての指示はない。古老の語では「昔は流し場でもミセでも天井が低く、流し場の屋根には小さな湯気抜きをつけていた、という。

これが一般的には明治中期迄残っていた柵榴口式銭湯から現状に至る過渡期の状態であろう。浴室部の天井を二重に折上げている現状はその高い部分が実は湯気抜きが異常に発達したものである事を物語っているのである。

次に浴室内部の意匠的变化について。

江戸時代の浮世絵に画かれた柵榴口をみると堂々とした唐破風屋根を載せ、幕板等には前記の様に、雲物花鳥の類を、浮彫や極彩色の絵で表現している。当時は薄暗い室内のことだからかなりアクセントの強いものが多かったようで、「湯屋万歳曆」によると江戸町民文化華やかな文政5年、柵榴口前戸へのビイドロ使用を禁止したという。しかしこうした装飾がどの銭湯にもあった訳ではなく、浴室の殺風景な薄暗さから人々を解放したのが、浴室での世間話と二階座敷の休憩であった。こうした中でこそ式亭三馬の「浮世風呂」が生まれたのである。明治期における浴室内部の装飾については資料が見つからずよく分らないが、古老の話では、明治時代の古い銭湯には、絵など無かったという。さて柵榴口が撤廃され、浴室が広く明るくなるにつれて、新たな装飾が導入される。ペンキで画かれた風景画、静物画などの「背景画」がそ

れである。大正初年頃、川越広四郎が神田猿樂町の「キカイ湯」の壁面を飾ったのが最初といわれる。同じ頃、近所の銭湯では漆喰でつくった鯉の滝のぼりで評判をとったというから、まだ前代の名残りがあつた様である。

### 3) 釜焚場・煙突・居室

この部分にも種々の変化があるが、その最大の要因は薪から石炭へという燃料の変化である。それは柘榴口改良にも結びつく。江戸時代の湯屋の仕事は、早朝の燃料集めから始まる。炭・古木・流木などが燃料源であつた。これらの低カロリー熱源では、柘榴口や戸棚風呂が工夫されたのも当然であり、この点では明治20年代から一般化してきた石炭の登場迄は、事情は同じであつたろう。それでも尚、安価な燃料を求める作業は継続されるが、昭和26年頃になると重油ボイラーの使用が普及し、釜焚の手間も大分軽減される様になる。従つて従業員数も次第に減少し、薪材時代には3~4部屋の居室が必要であつたのか、現在では家族だけで経営する所が多い。古い銭湯ではここを二階建てにしているが、最近のものでは平家とする例も増えている。

次に、銭湯の煙突について。

東京の町で銭湯を見つけるのは極めて容易である。屋号と温泉マークの入った煙突を目安にすればよいからである。由みに、参謀本部測量課によつて温泉マークが定められたのは、明治18年の事である。明治20年警視庁は、煙突の高さ30尺と定めた。それまでは、煙突についての規制はなかつた様である。古老によると、明治前期頃は煙突に土管を用い、後期になつてからは鉄管が使用される様になつたという。これは燃料の変化と一致する。この両者もまだ一部で用いられているが、現在では鉄筋コンクリート製のものが圧倒的に多い。

江戸時代はどうであつたか。

「江戸名所図会」や浮世絵にみる江戸の町家の屋根には、煙出しをつけたものがあるが、銭湯も恐らくこの程度の設備であつたろう。銭湯が、江戸の花火の火元になつた例は多かつたと思われるが、「武江年表」より一例を挙げよう。「芝明神前太好庵の向ひ湯屋より出火、浜松町片門前、金杉、芝田町辺、本芝海浜迄焼亡」(宝暦10年正月)。大火の火元となれば大商家でも破産する。「豪商の内たりとも風呂を焚かぬは、第一火の用心の為、二つに勘定なり」(「明治風俗史」所収「西沢李叟の記」)というのもこうした事情や物語っている。また銭湯の屋号について同書には「(江戸では)銭湯は大体一丁目に二軒づつは丈夫に有り、上方の如く大和湯・扇湯・桜湯などと呼ぶことなく、町名を上につけて湯と呼ぶなりいはば檜物町の湯とか、堀江町の湯と呼ぶ」とある。現在ではどうであろうか。東京23区内の銭湯屋号の実例で多い順に挙げると、松の湯(60例)・寿の湯(50例)・朝日(旭)湯(49例)、以下梅・鶴・大黒・富士(見)・亀・竹・日の出等が10傑で次に弁天・恵比寿・稻荷等の佳名が続く。これに対して、町名を付した屋号は、原則的に一町に一屋号であるから、銭湯の総数が増加した事もあつて、相対的に数は少なくなる。

## III章 銭湯分布の規則性

東京で銭湯を見つける事が容易であるのは前述の煙突の存在と共に、銭湯の規則的分布にもその一因がある。都条例によれば、銭湯相互の距離は市街地に於いては200m以上と定められている。地図にプロットするとその規則性はますます判然とする。間隔距離についても江戸時代以来の変遷がみられるのだが結局は、既得権をめぐつての業者側と官庁側の駆け引きの歴史である。これを現在の用語では「適正配置」という。

古老の話によると「明治時代には風呂屋の事を俗にカブと呼んだ」という。これは、銭湯の運営組織が株仲間によつていた事の名残りである。江戸時代には銭湯株の譲渡、売買あるいは新規加入にも厳しい規則があつた。文化7年に定められた「湯屋十組割付」によると、総株数は520株で、例えば二番組の日本橋組の場合でみると「男女六株、男七株、女二株、合十五株」である。これより30年程前の天明年間の江戸の町数は1650余町であるから、各町に銭湯があるという状態からほど遠かつた様であり、株仲間の統制が強かつた事の一つの例であろう。

現在都内の銭湯数は2700軒程あり、数の上では毎年僅かつつながら増えている。しかし後述する様に、微増の内容をみると、千代田・中央区など都心部に於ける転廃業の増加と対照的に、周辺の新興住宅地への進出の顕著な事が明らか

である。ここにも最近の都市動態の反映をみることができる。理由としては都心部に於ける夜間人口の減少、自家風呂を有する住宅の増加という外的条件もあるが、銭湯側の内部事情としても、人手不足と後継者難、戦前に建てられた銭湯の改築期にきている事等が挙げられよう。さらに銭湯の性質上大きな敷地を有する上に、利用に便利な場所を占めている事などは、転廃業の際の有利な条件となっている。

昭和42年頃からは「ゲタばき公衆浴場」「ビルぶろ」という新たな経営の形式が現われ始めており、分布図上は変化がなくとも、銭湯独特な姿が遠からず都心部から消えて行く傾向にあると云えよう。東京都心の景観の中から一つの日本的要素が失なわれるのである、それに積極的価値はなくとも。

## Ⅳ章 銭湯の建築年代と分布の推移からみた、東京の住宅地化の動き

図1は、昭和43年に東京都公衆浴場組合から都に提出された調査書に基づいて23区内の銭湯建設年代をまとめたものである。

経営者の交替などの為、建設年代の不明なものも若干あるが、実年代の明らかな最古の例は大正3年建築であり、関東大震災前の銭湯は11棟ある。その後から今次大戦前のは200棟程度残っているが、昭和12年から終戦直後の昭和21年迄の各年建築例は、いずれも僅か一桁に止まっているのは、戦災で焼失した事もあろうが、物資の入手困難であった当時の世相を反映していると思われる。戦後は急速な都市復興に伴って、銭湯建設も活発となり、特に昭和25～32年にかけては年平均120棟近く建設された。けれども、ここで銭湯建設のラッシュ状態は一段落し、そのあとは次第に減少の傾向を示し、昭和33～37年平均で70棟、昭和38～42年平均60棟に落ちている。

### 表に基づいた考察

- 1) 千代田・中央・港の都心部3区では、新たな銭湯需要は既に無くなっており、建設はほぼ定常的である。特に千代田区では昭和36年以降の建設数は零である。文京・目黒の両区でもほぼ同様の傾向にあり、これらの各区での建設数は改築が大部分であろう。
- 2) 昭和25年にピークがある、新宿・渋谷・台東・品川・江東・荒川・墨田・豊島の各区の場合には戦前に既に住宅地化が進んでおり、戦災を受けた銭湯の再建がここに集中したとみられる。由みに昭和20年当時、都内で開業していた浴場は400軒程度である。
- 3) 大田・世田谷・杉並・中野・葛飾・板橋の周辺各区では、昭和30年にピークがくるのは戦災復興の動きが次第にこの地区にまで進んできた事を物語る。現在では、建設数は大分下り坂にあるが、まだかなりの件数を示すのは次の各区と同様の理由が考えられる。
- 4) 江戸川・北・足立・練馬の4区では、現在でも銭湯の建設が連続しており、東京の住宅地が南西部よりも東北部方面で開発されつつある傾向を反映している。木賃アパートの建設が銭湯の需要を促す点も考慮しなければならないだろう。

本論文をまとめるに際して、全国公衆浴場業環境衛生同業組合会発行の「公衆浴場史略年表稿本」、武田勝蔵著「風呂と湯の話」その他風俗史関係図書を参考にした。

## Ⅴ章 資料紹介

### 資料1. 銭湯建築の実測図

図2, 3, 4, 5は昭和12年建設の浴場、明梅湯(世田谷区池尻町3-20-5)の実測図面である。この建物は東京に於ける浴場建築の代表的なもののひとつと言えよう。堂々とした屋根の入母屋破風、玄関の唐破風、上部の勾欄などが整った全体のプロポーションに融け込んで、美しく荘重な建築ファサードを創りあげている。勾欄により二階建てのように思われるが、実際には内部の脱衣所部分は吹抜けとなっており、専ら意匠的に設けられたものである。そして更には、脱衣

所部分の天井が折上げ格天井であり、浴室では壁面、カランなどに立派な風景画、武者絵、金魚絵が描かれているなど、浴場としては高度な建築的格式をもつて全体が構成されている。

建設当初は、浴場一般にみられる如く、表通りから入る路地の奥に位置していたが、玉川通りの道路拡幅に伴い、現在は大通りに面している。ファサード全体は立面図に表わされているが、現実には防火用のブロックとプラスチックの塀で目隠しされており、その建築的調和が破壊されているのは残念なことである。

## 資料2 公衆浴場（建築写真類聚・洪洋社・大正14年5月発行）

### 概要

この図書は次のような主旨に基づいて行なわれた設計競技の入選案を収録したものである。すなわち、市街地の浴場建築というものは漸次改善されていってはいるが、大改善は望むことが出来ないで、郊外地に位置する遊戯や運動に関連した娯楽浴場の在り方を精神として一般から設計募集したものである。そしてまた、民衆的であることと、精神的、肉体的疲労の慰安を目的としている。

入選案の代表的なものを紹介すると、まず一等案はR・C造、外部モルタル、浴室は壁モルタル塗、床はタイル、モザイク張りなどで構成されている。その設計者の述べるところによれば、清礎な気持のよい建築を目指し、植込み、生垣、噴水、建物の輪郭やマッサなどに田園都市にたつ浴場としての配慮を行なっている。またユーモラスに、そしてくつろげるように、浴室では半円の窓、円形浴槽、噴水、壁面、天井よりの電燈などに趣向をこらしている。夏期の冷水浴客のためには、浴室扉を開放して休憩室前面の池を利用し、階上には理髪室、美容室、球戯室が設けられている。二等案はR・C造、主屋部分ヴォールトで、ゼツェツォン風の設計である。三等案はR・C造だが、設計者によれば慰安の水平線、希望の垂直線で構成されている。

このように、佳作二作のR・C造で和風屋根、洋風壁面をもつ和洋折衷の例外的作品を除けば、一般的にはR・C造、半円と円の平面的立面的利用などの基本要素があり、初期近代様式とも言うべき性格を共通に抱いている。

### 解説

公衆浴場史略年表稿本によれば、大正10年に名古屋市で近代的様式（コンクリート造、丸槽、タイル洗場、不燃建築）の浴場が建設されている。一般的に浴場建築近代化の動きはこの頃から始まっているが、大正12年の関東大震災を契機に東京でも浴場近代化の動きが起ると考えられる。この時には市内971軒の浴場の内630軒が焼失しているのである。震災による銭湯激減のための公設浴場の開設や、この時期から始まる都市周辺の市街化の傾向と共に、大正末期の革新的傾向が浴場建築近代化の機運をうながしたと考えられる。このような社会的状況を背景に、田園もしくは郊外地にたつ勤労者のための遊戯や運動施設をもつ、娯楽的浴場の模範例として公募されたものである。入選案のすべてが鉄筋コンクリート造で、佳作第二席の和洋折衷案を除き、すべての案が当時の日本に於ける建築思潮を反映する近代様式で扱われている。例えば一等案は、正面に噴水をもち、植込み、生垣、建物の輪郭やマッサなどに、田園都市にたつ浴場としての配慮を加えてあり、冷水浴のための池、階上の理髪室、美容室、球戯室などが設けられている。このように、この設計競技は従来の銭湯の概念を一新しようとする意欲的なものだったが、現実には浴場建築は建物の不燃化、形式的近代化を吸収したのみで、浴場の在り方を変える、もしくは江戸期の娯楽的風呂の伝統を復活することとはならなかった。

この設計競技の現実的影響はともかく、現在残された図集は浴場建築に於ける近代化の道程を知る上で、貴重な資料となっている。

## 資料3 銭湯営業関係資料－渋谷区千駄ヶ谷「朝日湯」－

本資料は 浴場組合関係の古老の聞き取り調査を行った時に得たものである。本人は既に廃業しているが、廃業理由としては子息が勤め人となって後継者がなくなったこと、従業員が結婚して転職したこと、建築が老朽化していたことなどが挙げられた。もとは神田で営業していたが、大正時代のはじめに大火で焼失し、さらに震災でも焼かれたために千駄ヶ谷の地に移ったという。図6は大正13年の建築許可申請用の図面である。

1) 指令第一五三一五号

豊多摩郡千駄ヶ谷町大字千駄ヶ谷八百二十一番地

浴場建設者 ○○○○

大正十三年七月十八日願肩書地所在浴場増築竝一部改築ノ件許可ス

大正十三年七月二十八日

警視總監 太田政弘 印

(以下の資料も同じ形式に則つとるので本文だけを記す)

2) 大正十三年八月二十三日願肩書地所在浴場改築ノ件許可ス但シ許可ノ日より九十日以内ニ浴場土台工事完了セサルト  
キハ許可ヲ取消スコトアルヘシ

3) 大正十三年十一月七日願肩書地所在浴場改築工事中設計変更ノ件許可ス

4) 大正十三年十一月二十五日届肩書地所在浴場改築工事落成ニ付其ノ使用ヲ認可ス

5) 昭和二年七月二十六日願(肩書地)所在浴場敷地坪数増加ノ件許可ス

6) 昭和二年十月八日願肩書地ニテ浴場営業ノ件許可ス

7) 昭和四年四月二十六日願肩書地所在浴場用水ニ水道水併用ノ件許可ス

8) 昭和五年八月八日願肩書地所在浴場増築修繕並設備変更ノ件許可ス

(この書類には改造申請届が付されており変更要旨欄に次の項目がみえる。

一 釜場上及火焚場上ニ中二階ヲ作り物置トス

一 在来ノ上り水及湯槽ヲ廃シ水栓式トナスコト

一 髪洗場窓ヲ上方ニ揚ゲ腰六尺及流シ場床ニ三寸八角タイル敷クコト 他ハ在来ノ儘トス

9) 昭和五年八月二十五日届肩書地所在浴場増築修繕並設備変更工事落成ニ付其ノ使用ヲ認可ス

10) 昭和五年九月二十七日願肩書地所在浴場湯質変更ノ件許可ス

11) 昭和六年九月二十四日付申請制限外場所ニ燃料(石炭木材)貯積ノ件認可ス

12) 昭和六年十一月十二日付届肩書地所在浴場ニ於ケル湯質変更ノ件認可ス

13) 昭和七年八月十八日願肩書地所在浴場ニ温水器設置ノ件許可ス

(これには設置願書類が添付されており、構造仕様書中に次の項がある。)

一 温水の方法

男女流場ヨリ流出スル排水ハ相当ノ温度ヲ有スルヲ以テ夫ヲ前記温水器装置(注 銅板製の導管を八本並列したもの)、  
排水溝ニ導キ温水器装置、間隙ヲ余温アル前記排水ヲ通過セシムル時ハ水槽ヨリ引水シタル冷水モ幾分か温水ト変ス  
ルモノトス而シテ其温水ハ元槽及「カラン」用調節槽へ導水セシムルモノトス

14) 昭和七年十一月十九日届肩書地所在浴場温水器設置工事落成使用ノ件認可ス

(この書類からは肩書地が、渋谷区千駄ヶ谷四丁目八百二十一番地 と記される。)

15) 昭和十年六月十二日願肩書地所在浴場設備増設ノ件許可ス

(添付書類によるとこの時の設備増設の要旨は、流し場中央にコンクリート造の土手を設け湯栓四個水栓二個を増設することであつた。)

16) 昭和十年八月九日届肩書地所在浴場設備増設工事落成使用ノ件認可ス

17) 昭和十年十二月三日附届肩書地浴場ニ於テ湯質(レヂオ放射溶剤)変更ノ件認可ス

18) 昭和十年十一月二十八日届肩書地所在浴場煙突改築工事落成使用ノ件認可ス

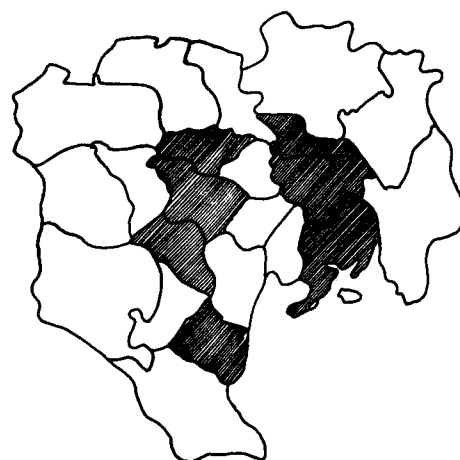
19) 昭和十一年八月十三日附申請肩書地浴場内燃料置場外燃料置場ニ於テ容易ニ引火セザル丸太ノ類ニ限り貯積ノ件認可  
ス

20) 昭和十二年六月九日附届肩書地浴場ニ於テ湯質(沃度剤海草ノ泉ヲ清涼浴剤バスキイン)ニ変更ノ件認可ス

21) 昭和十二年六月廿一日附届肩書地浴場ニ於テ湯質(清涼浴剤バスキインヲ恵那温浴剤ニ)変更ノ件認可ス



第 1 グループ



第 2 グループ



第 3 グループ



第 4 グループ

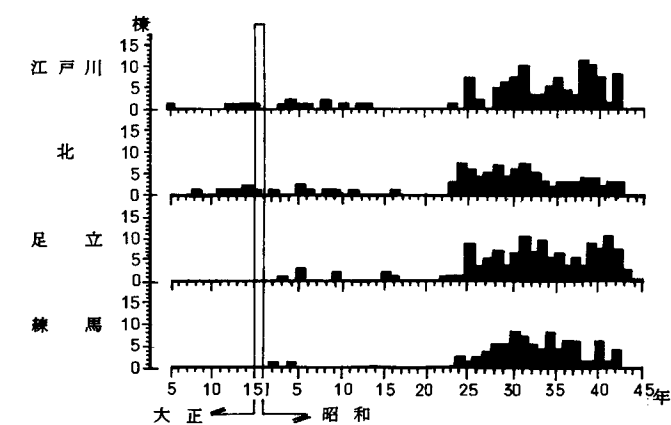
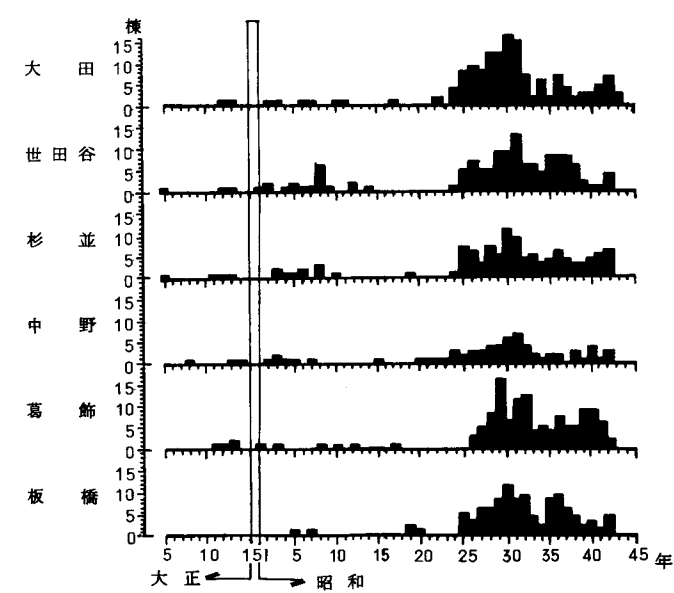
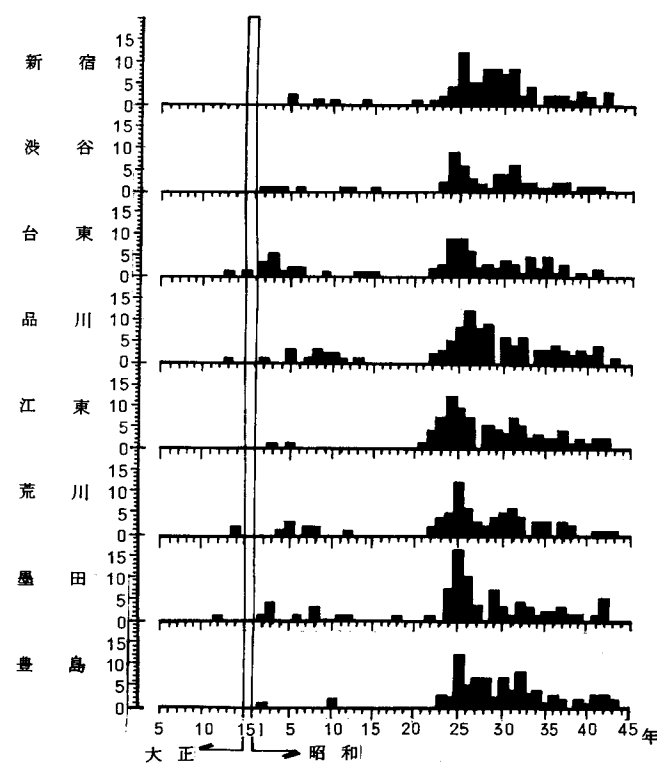
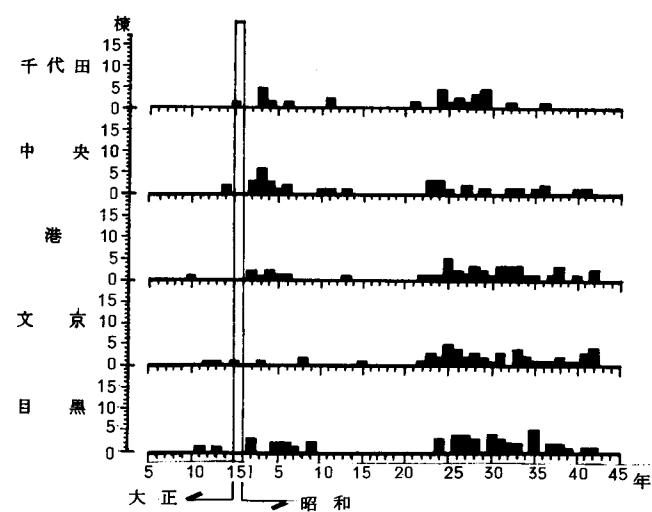


図1 東京・23区浴場建築年代と分布の推移



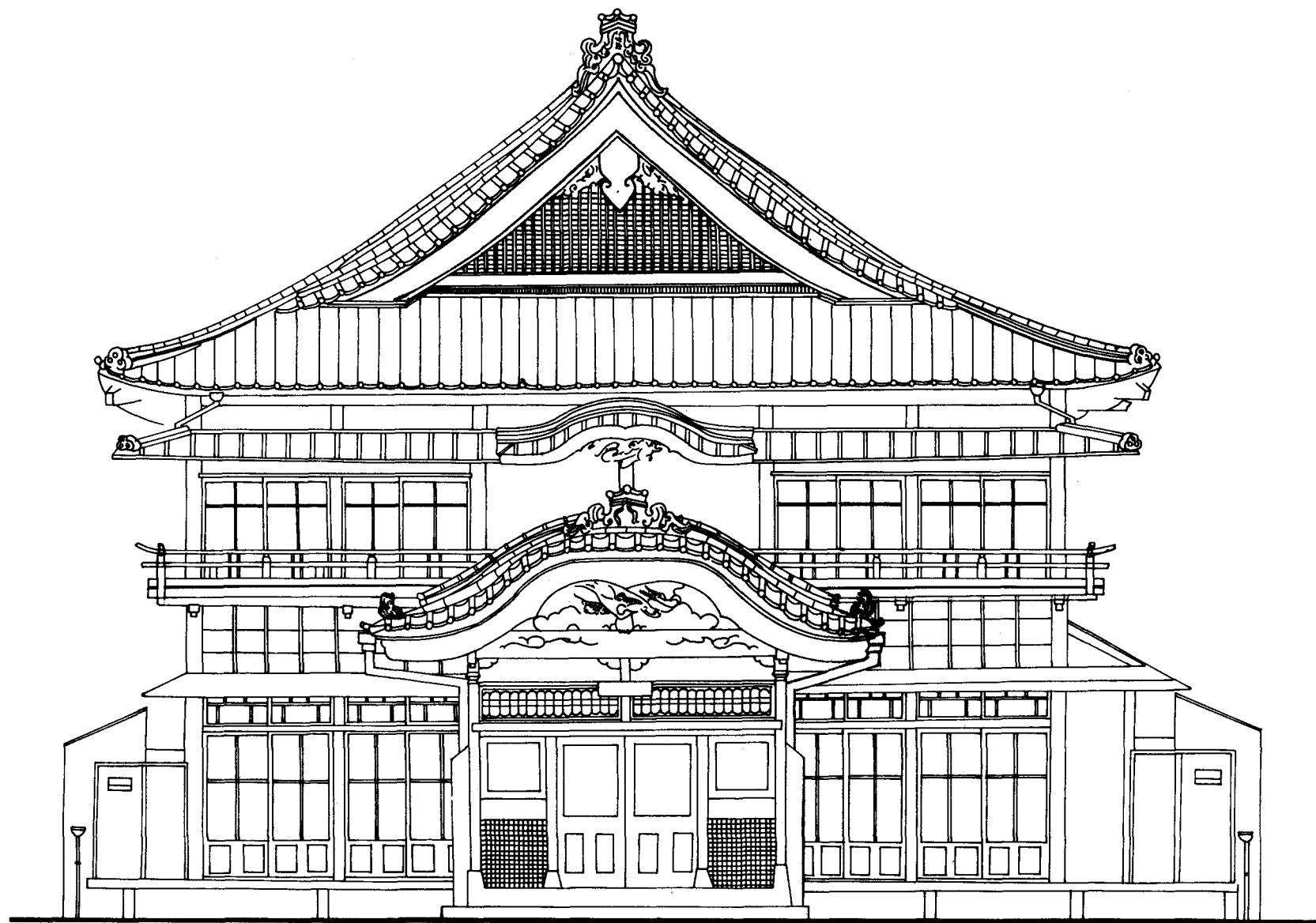


図2 「明梅湯」の立面図

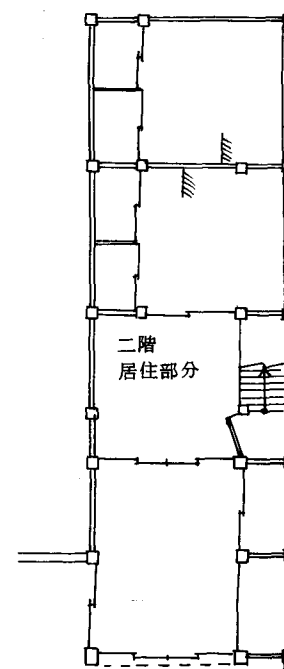
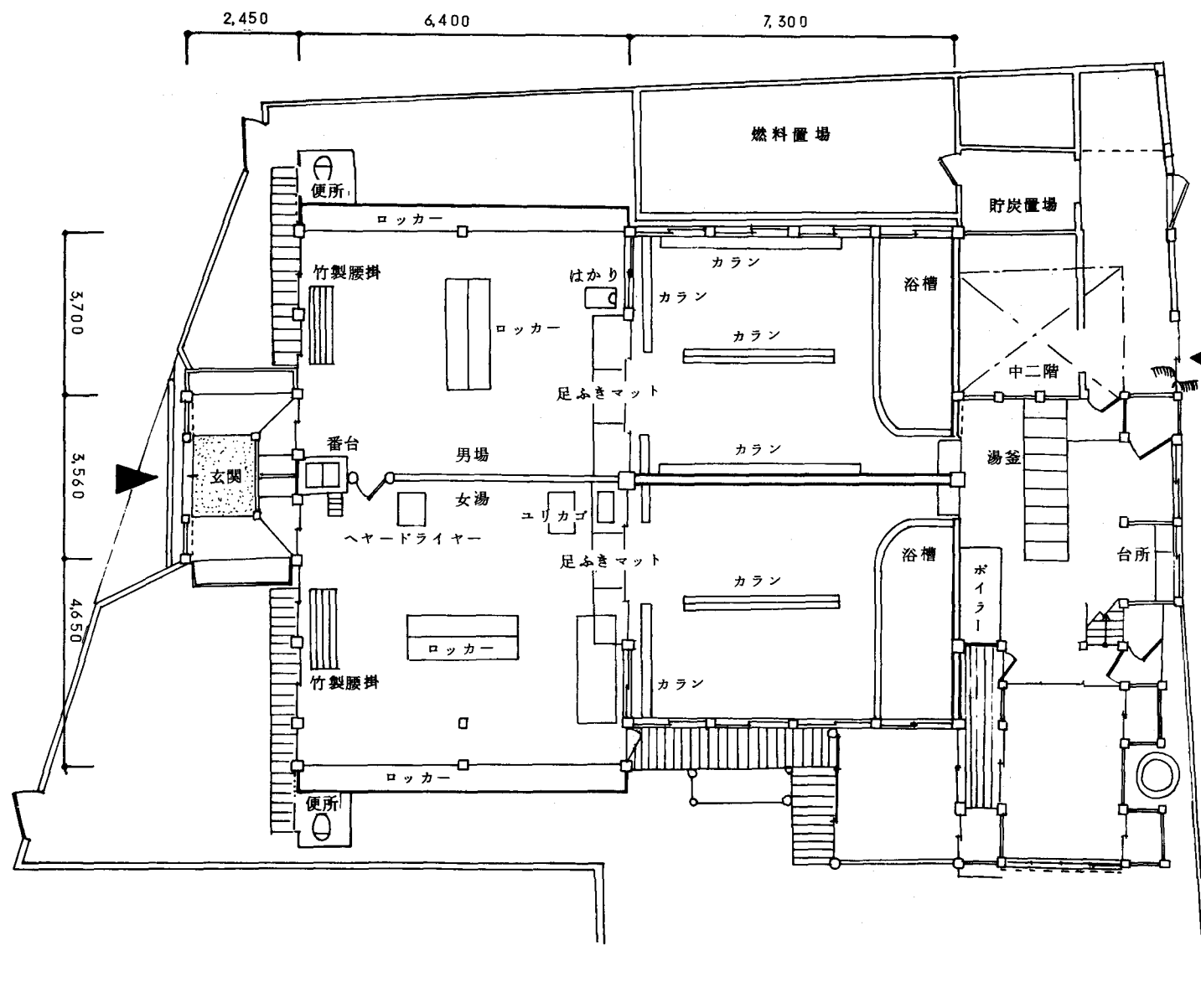


図 3 「明梅湯」平面図

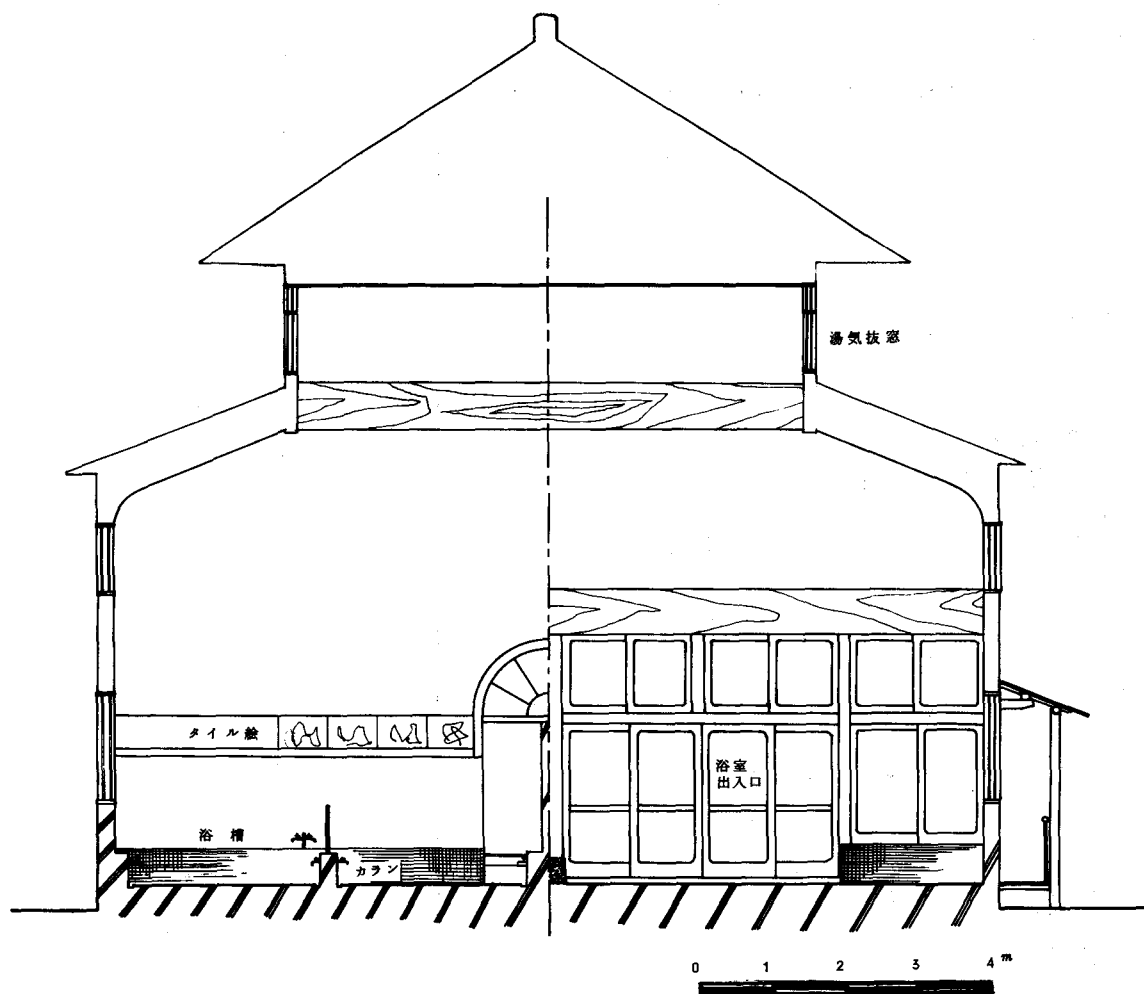


図 4 「明梅湯」断面図

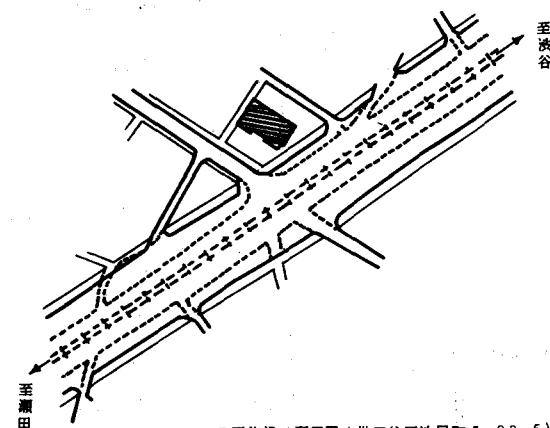


図 5 「明梅湯」配置図 (世田谷区池尻町 3-20-5)  
玉川通りの実線部分が現状、点線は旧状を示す

図 5 「明梅湯」配置図 (世田谷区池尻町 3-20-5)  
玉川通りの実線部分が現状、点線は旧状を示す

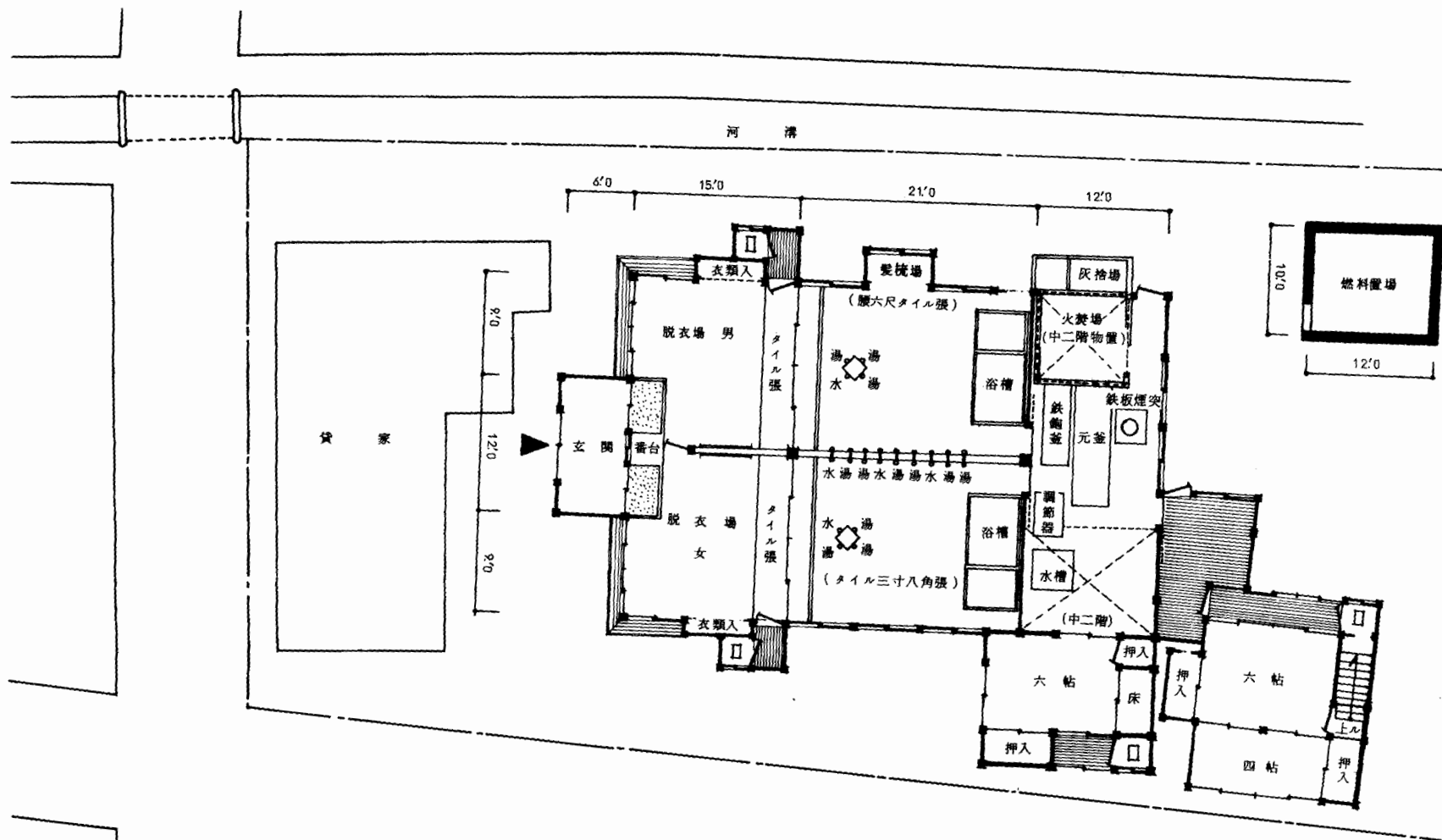


図6 渋谷区千駄ヶ谷「朝日湯」大正13年建設時の平面図

(昭和42年廃業)

単位は尺を使用する。

### 第 3 部

## 大正・昭和期の東京下町の住宅

—墨田区京島三丁目における長屋の調査研究—

共同研究者 石 井 昭

一 色 史 彦

今 田 栄 二

大 西 静 代

第Ⅰ章 研究目的

第Ⅱ章 建築の実測図及び住まわれ方

第Ⅲ章 調査地区に長年在住する人と

の対話

## I 章 研究目的

墨田区は、隅田川・荒川放水路・中川・北十間川・堅川・大横川・横十間川などの水路の存在が示すように、海拔1 m内外の低湿地がその大部分を占めている。区のほぼ中央に位置する京島三丁目の周囲に残る中居堀・曳舟という地名も往時南北に貫流していた川の名残りである。この周辺地域には明治中期以降、ゴム・紡績・石鹼・金属加工などの大小工場が進出するとともに、明治35年に東武鉄道が、大正元年には京成電軌（現在の京成電鉄）がそれぞれ開通した。（図1参照）

現在見られる自然発生的で無秩序な密集家屋群は、大正4、5年頃から急速に大工場周辺に群がった下請家内工業を中心とする商工併用住宅と小規模な工員住宅を核として形成されたものである。とりわけ京島三丁目周辺は関東大震災・第二次大戦による被害を受けず区画整理も行なわれなかったため昭和初期の状態がそのまま老朽化した地域であって戦前の建築の全建築物に対する割合は63%にもものぼる（昭和40年7月現在）。特に旧吾嬬町西四丁目では、大正11年から昭和元年にかけて建設された家屋が17.1%と最も高い数値を示し、昭和2年から同6年のものがこれに次ぐことは、大震災後一段と顕著であった人口流入を物語っている。使用目的別にみると、専用住宅が67%、商工併用住宅が23.6%である。次に延床面積については、専用住宅の場合平家で7～8坪、二階家で13～15坪、併用住宅の場合では16～20坪のものが最も多くこれが各々の典型的規模とみてよいであろう。

次に昭和39年に旧吾嬬町西四丁目のうち現在京島三丁目に含まれる地区（図2の斜線部分）について行なわれた調査によると、人口密度・699人/ha、専用住宅率・69%、住宅規模平均・49㎡、裏家率・76%（巾員4m以上の道路に2m以上接していない敷地に建っている住宅の率）、道路率・8%（巾員4m以上の道路）、上水専用栓率・86%、水洗便所率・0%、降下煤煙・40t/㎥、騒音・62ホーンとなっており、これらはいずれも都市環境条件として注目すべき数値とされている。

地勢が低平なため溝渠も排水状態が悪く、致る所諸工場の汚水を湛へたまま停滞して悪臭を醸成する状態であって、この点では恐らく全市中最も甚だしい区と見られるであろう。道路も概ね粗悪であって降雨の際は泥濘を生じ歩行に固難なる所も少なくない……これは昭和9年当時のこの地区の状態であるが、現在この地で受ける印象は、清掃の行き届いた下水溝と、路地・軒先の植木鉢など案に相異なる清潔さであり、騒音も通過交通によるものよりもおのがじしの活気ある日常の生産活動のそれであり、それにも増して住民相互の強い協同意識である。住民意識調査によっても住みごころの良さを挙げる人の多いのは、あながち虚勢ではないであろう。ともあれ軒を接した長屋形式の密集住宅群が火災を出さずに今日迄約半世紀の間存在し続けてきたのは一種の驚きであるが、最近では平家形式長屋の各戸がそれぞれにラスモタル式の簡易耐火構造による二階家に改造する例も目立ってきた（図3参照）。本論文の目的は、このような現状を建築図面として記録しておくことにある。なかに納めた図面の多くは、昭和44年度本学卒業生今田栄二・大西静代両君の実測図に基づく。末尾に納めた住民との対話録は当地区の性格をよく浮き彫りにしている、これも両君の作業である。

## 主なる参考文献

1. 東京市役所編 「東京市新市域不良住宅地区調査」 昭和11年3月
2. 日笠 端著「都市と環境」NHK現代科学講座9、日本放送出版協会 昭和39年
3. 松田真好・棚岡保行「旧吾嬬町西四丁目寺島四丁目に於ける過密住宅地域の調査研究」昭和42年度都立大学建築学科卒論
4. 今田栄二・大西静代「京島三丁目における長屋の調査研究」昭和44年度都立大学建築学科卒論

## II 章 建築の実測図及び住まわれ方

実測の対象としたのは、京島三丁目のほぼ中央部分の家屋である。（図4参照）

各建築年代は、最後のJ氏宅（昭和2年建築）以外はいずれも大正年間でありこの附近は密集住宅化のとりわけて早かった区域であったようだ。A～D氏宅は表長屋（平家・4軒連続）、E氏宅は2階建表長屋（5軒連続）、F・G氏宅は裏長屋（平家・5軒連続）、H・I氏宅は2戸建、J氏宅は1戸建の文化住宅のそれぞれの建築例としてとり上げたものである。用材は概して木細く簡素であるが、玄関のガラス戸や出窓の格子などの木細さが建築の立面に軽快なリズム感を与える。屋根材には多く瓦を用いるのは密集住宅地である為であろうか。

住宅の住まれ方では、どの部屋も多目的に使用されるのは当然であるが、特に玄関脇の2畳数の部屋は使い勝手がよさそうである

◎ A氏宅 （図5参照）

- ・ 大正末年建築
- ・ 表長屋一部2階建（2階部分は増築）
- ・ 職業不明
- ・ 家族構成 夫婦と子供2人 間借人1人
- ・ 部屋の使われ方

玄関の奥の2畳には食器棚・冷蔵庫等を置き台所として使用する。6畳間は食事・就寝等に使われ、玄関脇には机を置いてこを子供の勉強コーナーにしている。4畳半の間は主として就寝用である。増築部分の1階タタキの所は洗濯・仕事場（但し現在機械は置いていない）であり、2階の約3畳間は貸間である。

補）この家の平面は、敷地の制約の為に奥行が2間半と浅くなるので他の長屋には見られない形式をもっている。

◎ B氏宅 （図5参照）

- ・ 大正末年建築
- ・ 表長屋平家
- ・ 無職
- ・ 老女1人暮らし
- ・ 部屋の使われ方

食事・就寝は6畳間です。ここはまた手内職（メリヤス加工）の場合でもある。2畳間は、タンス等が収納される。

◎ C氏宅 （図5参照）

- ・ 大正末年建築
- ・ 表長屋平屋
- ・ 職業 会社員
- ・ 家族構成 夫婦・子供3人 計5人
- ・ 部屋の使われ方

食事・就寝は6畳間でやる。この家庭は比較的家族構成員が多いため、玄関脇の2畳間の使用が多目的である。すなわち、昼の子供のいない時は、主婦の裁縫の場として、夜は子供の勉強と就寝の場として使われる。

◎ D氏宅 （図6参照）

- ・ 大正2年建築
- ・ 表長屋平家
- ・ 職業 金属加工の家内工業
- ・ 家族構成 夫婦・女兒1人 計3人

#### 部屋の使われ方

食事・就寝は、4 畳半の間で行なわれる。3 畳は現在子供の勉強部屋である。勝手脇の土間はもと玄関であったが、現在は簡単な機械を据え付けて作業を営んでいる。

#### ◎ E 氏宅 (図 7 参照)

- ・ 大正 2 年建築
- ・ 表長屋 2 階建
- ・ 職業 染色業を自宅で営業
- ・ 家族構成 夫婦・祖母・子供 2 人(男女) 計 5 人
- ・ 部屋の使われ方

食事は 1 階の 4 畳(板張)間です。6 畳の間は昼間染物の整理などの場であり、夜は就寝用となる。土間は勝手と仕事場として使われる。2 階の 4 畳間(増築部分)は、子供 2 人の勉強部屋で他の 2 室の境は仕切襖が取り払われておりここは主に染物の乾燥等に使われている。

#### ◎ F 氏宅 (図 8 参照)

- ・ 大正 2 年建築
- ・ 裏長屋平家
- ・ 無 職
- ・ 病気がちの老女の 1 人暮らし
- ・ 部屋の使われ方

玄関脇の 2 畳には薄団を敷き、いつでも横になれるようになっている。食事は 6 畳にチャブ台が置いてあって、体の調子のよい時はこの部屋ですするという。

#### ◎ G 氏宅 (図 8 参照)

- ・ 大正 2 年建築
- ・ 裏長屋平家
- ・ 職業 会社員
- ・ 家族構成 夫婦・子供 2 人(大人) 計 4 人
- ・ 部屋の使われ方

食事・就寝は 9 畳間(但し 3 畳分は変形で小さい畳)で行なわれる。玄関脇の 2 畳と隣の変形 2 畳は子供の寝室である。玄関部分のもと土間であったのを踏み込みを除いて板張にして下駄箱や鳥籠などを置いている。9 畳間の押入れ脇はタンス・洋服掛けなどの収納部分となりカーテンで仕切っている。子供の成長した家庭では、おのずと各人の持物が増えて収納に大きなスペースが必要となる。

#### ◎ H 氏宅 (図 9 参照)

- ・ 大正 2 年建築
- ・ 裏家 2 戸建
- ・ 職業 会社員
- ・ 家族構成 夫婦・子供 2 人(男女) 計 4 人
- ・ 部屋の使われ方

食事・就寝は 6 畳間で行なわれる。玄関脇の 2 畳に板敷部分を増築して子供の勉強部屋となっている。6 畳間には 1 間の押入とその脇に板敷がありここを収納スペースとして冷蔵庫・タンスなどを置いている。30 cm 程突きだし



た棚には、植木鉢・金魚鉢が並べられていた。台所にも出窓風の造り付けの戸棚があり、かなり余裕のある住まい方をしている。

◎ I 氏宅 （図9 参照）

- ・ 大正2年建築
- ・ 裏家2戸建（H氏宅の隣り合わせ）
- ・ 職業 職人
- ・ 家族構成 老夫婦
- ・ 部屋の使われ方

食事・就寝は、6畳の間です。2畳間先の下屋は板で囲い物置になっている。6畳のタンス上方には、仏壇と神棚が取り付けられている。台所も便所も夫婦2人用としてはゆったりと使っているようだ。

◎ J 氏宅 （図10 参照）

- ・ 昭和2年建築
- ・ 和洋折衷の独立住宅
- ・ 職業 不動産業を他所で営む
- ・ 家族構成 夫婦・祖母・子供
- ・ 部屋の使われ方

4畳半の旧洋間は現在畳を入れて子供部屋に、勝手の一部は元風呂場であったのを板張りに改造して冷蔵庫などを置いている。6畳間は居間及び祖母の室、8畳間は客間及び夫婦寝室であり、境の襖の前にはタンス等を置いている。旧洋間脇の部屋は主婦の洋裁の仕事場として増築したもの。

補）この家の周辺はもと沼地であったのを上野松坂屋建設工事の廃土を以って埋め立て宅地として分譲住宅として売られたもので、同種の「文化住宅」が集まっている。

この家は昼食時と夜間だけ家人がいる状態であるため、詳しい寸法取りができなかった。

## Ⅱ章 調査地区に永年在住する人との対話

### 其の1

△ 人物 京島三丁目49番地の5に住む工場主 大正8年、本所に生まれ、震災で被災し、以後現在地に移り住む。

△ 内容

問 「商店街通りと交わっている、クネクネ曲っている道は、昔、川が流れていたそうですが、何という名でしょうか？」

答 「あれはかつて、この辺がまだ田んぼだった震災前には、用水堀でした。あれは中川に架かっている、旧四ツ木橋まで伸びていた『中居堀』というものです。」

問 「震災前というと、この辺の周囲の眺めはどんなだったでしょう。」

答 「私の家の縁側から、中川を行きつ、戻りつする帆掛舟が見えたものです。私が小学校にかよっていたころですから、40年以上も前の事です。」

問 「それでは、この辺の地形が高かったということですか？」

答 「そうです。今は土地がどんどん沈下して川の方が高くなっていますね。」

問 「その頃は、田んぼばかりだったわけですが、家も点在していましたか？」

答 「ええ、地主と農家です。」

問 「他の職業の人は居りましたか？」

答 「旧番地でいえば、吾郷西6丁目、7丁目、8丁目にあたる、中居堀兩岸に皮をはいだり、なめしたりする“えと”今でいう新平民の部落がありました。といっても、あなたたち若い人には、よく理解できないでしょうが、僕達は、そこの人たちとは口もきけなかったもんですヨ。」

問 「商店街はいつごろ、どういふ動機から出来たのでしょうか？」

答 「あそこの道は、田んぼだった頃からの主要道じゃなかったんでしょうか。そこに自然発生的に出来たと思います。」

問 「戦后、特に変革が加えられたというような事はありましたか？」

答 「特別な事はしていませんが、戦后『橋通商業協同組合』が出来たこと位です。」

問 「この地区は、こんなに家が建て込んでいるのに、震災の時も、空襲の時も、火事がおこらず、焼け残ったという事は、なにか特別の防火体制でも採っているのですか？」

答 「実は、私も震災で焼き出されて、こちらへ移ってから、もう40年以上になりますが、火事の恐ろしさというものを見た経験したことがないんです。それに僕のうちも、家作をいくつかもっていましたが、そこに住んでいたおかみさん達なんか、昼どき、路地で、その頃は、ガスなんてもんはなかったですからネ、七輪に炭火をおこして、ほっておいてどこかで長話をしているんですよ。七輪から火花がパチパチと狭い家の間に飛び散って、私は子供心にも『あぶないなアー』と、思いましたが、それでも、火事が起らないんですよ。まあ、一口に言えば、やっぱり一軒一軒がよく注意しているんでしょうナ。他の地域の人達より、お互いの迷惑を考えているんでしょうナ。」

問 「この地区は、家内工業が盛んですが、どんな内容でしょう。又、下請の親会社は、どこですか。」

答 「この辺は、戦前から、通称『けとばし屋』と呼ばれる『金属打抜き』をやっている家が多いですネ。だいたい、車の部品の更に又、ごく一部品を作ったり、メリヤス、ハップサンダル等の下請の下請をやっています。親会社なんてものではなくて、その辺の町工場の下請で、つまり、スリークッションの下請ですよ。勿論、たどってゆけば、いずれは大きな会社に行きあたるわけですがね。」

問 「それでは、鐘ヶ淵等の、この周辺の大工場とは、それほど密接ではないということですね。」

答 「もちろんです。さっきいった通り、全然関係なくはないですがネ。」

問 「この辺の産業が急激に発展するなにかキッカケみたいなものがありましたか？」

答 「それは、明治通りが、約43年前位に通ってから、産業がとみに発展したようです。」

問 「お宅も地主さんで、家作をもってらっしゃった訳ですが、具体例として、典型的な棟割4軒長屋の建築費は、どの位、経費がかかりましたか？」

答 「6畳・2畳・勝手・玄関・便所付きのごく普通のもので、1軒当り85円平均ですから、4軒長屋では300円前後でしたネ。」

問 「水道は？」

答 「だいたい8軒に1つ、表に洗い場のついた共同水道です。昔の井戸端と同じですナ。」

問 「長男が、この辺の町工場の工員用宿泊だといわれているものもあるようですが？」

答 「ええ、それもあるようですが、ただし、賃貸で、寮みたいな物ではないです。町工場の工員さん達が、家族と安い家賃でかりてすんでいます。」

問 「住んでいる人の気質とか、人の出入についてはどうですか？」

答 「戦前も戦後も、ここに長い事すんでいる人が多いから、今の若い人の事は、わからないが、とにかく、きどらない、あけっぴろげな下町気質で、お互いに助け合い、たとえば、米、しょう油などの日用品まで貸借する近所づきあいですよ。近代的なアパートに住んでいる奥さん達と違って、見栄も張らなきゃ、敬語も使わず、他人のおかみさんだって『てめえんちのおっかあ。』呼ばわりするという長い間のつきあいから親子以上のつながりが出来てます。」

問 「どうして、人の移動が少ないのでしょうか？」

答 「きっと、物価も他に比べたら安いし、それにどこだって住めば都ですし、とにかく、口ではいい表わせないが、なにか住みやすいふんいきがありますからネ。」

問 「なにか、災害でこの地区が被災したことはありますか？」

答 「震災の被害はゼロです。その頃、ここは東京府下南葛飾郡吾嬬町字小村井（おもらいとなまる。）といって、ほとんど家がなかったからネ。二次大戦後、隅田川と中川のポンプがこわれて、一度床下浸水があったが、その他は、集中豪雨でも、絶対浸水しない。」

問 「本土空襲の時には、どの辺がもえましたか？そしてこの地区には、爆弾がいくつかおちたそうですが、どこでしょう。」

答 「明治通りからむこうと、東武線の本所側が燃え、曳舟から向島警察まで燃えのこりました。私の家には、3月10日の大空襲で250Kgバクダンが落ちて、もえてしまいました。他の場所に落ちたのは、みんなで消しとめて、それ以上、ひろがらなかったようです。」

問 「それでは、この地区は戦災後の復興計画に入らなかったんでしょネ。」

答 「いえ、復興計画はありませんが、なにしろ燃えなかったので、立ちのきやいろいろ問題があつて、立ち消えになりました。」

問 「町の中を歩いてみて、よく入口に『飛木稲荷』とかいたお札をみかけるのですが、『飛木講』といったようなものがありますか？」

答 「いいえ、飛木稲荷は押上の方にある氏神様で、この辺とはあまり深い関係はありません。」

問 「それでは、原公園にある田丸稲荷はどうですか？」

答 「田丸講があり、町が寄付で管理しているので、氏子はいません。」

問 「原公園の原というのは、人の名前だという事を、ききましたか？」

答 「あの公園は“原忠三郎”という大地主の庭で、稲荷は原さん個人所有物でしたが、戦後の農地解放で保持できなくなり、土地を区に寄付して、稲荷を町で管理してくれるように頼まれたのです。あの公園の裏には池があり、その池端に日活の撮影所があり、日活の古い役者はここに住んでいました。今は埋めたてられて家が建っていますが、あの池には、魚やえびが採れて子供の頃よく遊んだものです。」

問 「町あげての年中行事は、どんなものがありますか？」

答 「4月に大掃除、9月初旬の土日に、おみこしの出る秋祭があります。」

問 「この地区は、家が建てこんでいるわりには、路地にゴミ一つおちていないし、悪臭もないし、とてもきれいだという印象をうけるのですが……」

答 「どぶは毎月10日と25日に交替で掃除しています。」

## 其の2

△ 人物 京島三丁目45番地の2に住む大工・大正2年より、現在地で、大地主のお抱え大工をして、現在に到る。

△ 内容

問 「大正2年、つまり大工をお始めになった頃は、この辺は、どんな様子でしたか？」

答 「一面のたんぼだった。」

問 「急変したのはいつごろでしたか？」

答 「家が急に建ちはじめたのは、震災後だナ。」

問 「改築した家を、ずいぶん見かけますが、いつごろ改築が盛んでしたか？」

答 「戦後に、じわりじわり改築したものだ。それも、ずっと住んでいる人が改築したもので、新しくここへ引越してきた人は、ほとんどない。」

問 「高島さんは、この地区の長屋をずいぶんお作りになったそうですが、標準的な4軒長屋の工期はどの位ですか？」

答 「1ヶ月から1ヶ月半だナ。」

問 「その長屋の単価は坪いくら位で出来ましたか？」

答 「昭和5.6年頃で、坪50円位だ。」

問 「寸法取りは、やはり江戸間ですか？」

答 「そうです。柱の芯心の寸法だ。」

問 「軒高が低いようですが、家が全体に小さいのに比例して、畳が小さいというような事はどうでしょう。」

答 「畳は、普通の6尺×3尺だ。」

問 「各部分の材料をおしえていただきたいのですが、下見板は何を使いましたか？」

答 「杉だ。それも廉い4分板。」

問 「柱は？」

答 「米松、米桐で、4から4.5インチのものだ、現在は、杉だが……。」

問 「この辺は、軟弱地盤ですが、基礎はなにか特別な方法をもちいましたか？」

答 「9尺の松の杭をうちこみ、1尺から1尺3寸角の大谷石を置いた上に、赤松や檜の土台をおく。」

問 「壁は？」

答 「荒壁に漆喰仕上げの真壁だナア。」

問 「床板は？」

答 「松の6分板だが、削るから3分5厘位になるが……」

問 「小屋組は？」

答 「普通の和小屋だ。」

問 「屋根材には、日本瓦を多くみかけるようですが……」

答 「今みたいに、ひっかけてとめる瓦葺じゃなくて、土を盛って瓦をのせてゆく土敷きというものだ。勿論、一番廉い日本瓦だが……」

問 「格子をよくみかけますが、材料は？」

答 「杉、えぞ松だナ。長屋には固定したものが多いが、出格子といって、ポッカリ取りはずしのできるものもある。」

問 「敷居や鴨居は？」

答 「やはり、杉、えぞ松が主だった。」

問 「表長屋によくみうける、軒裏の、セガイ造りというのは、飾りですか？」

答 「セガイ造り？？、出し桁造りの事だろう。あれは、柱から、3尺も出た軒の重みをささえるために、柱に、ほぞをあけて、1尺から1尺2寸程の長さの材をしっかりとつけ、その上に、出し桁をのせてあるのだから、けっして飾りだけじゃないんだ。」

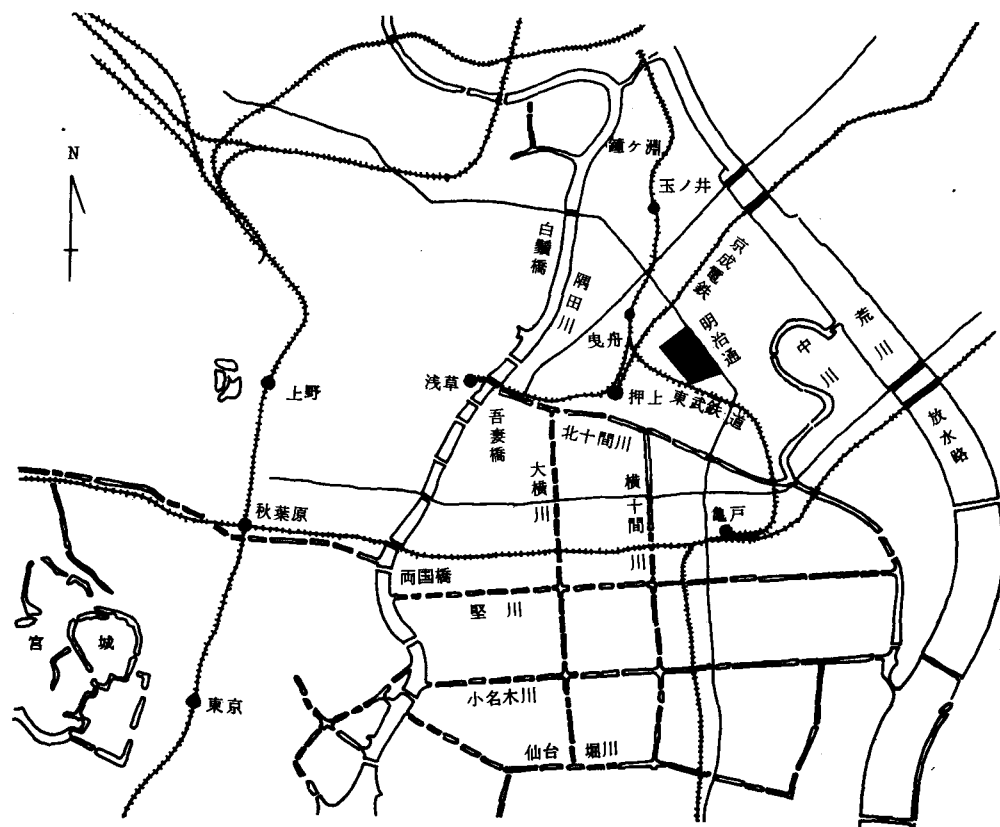
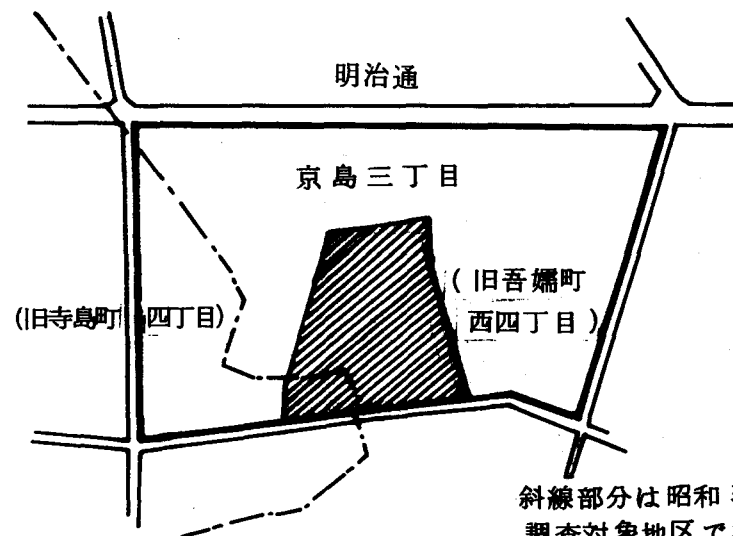


図 1 京 島 三 丁 目 の 環 境



斜線部分は昭和39年の  
調査対象地区である。  
(昭和40年3月町名変更)

図 2

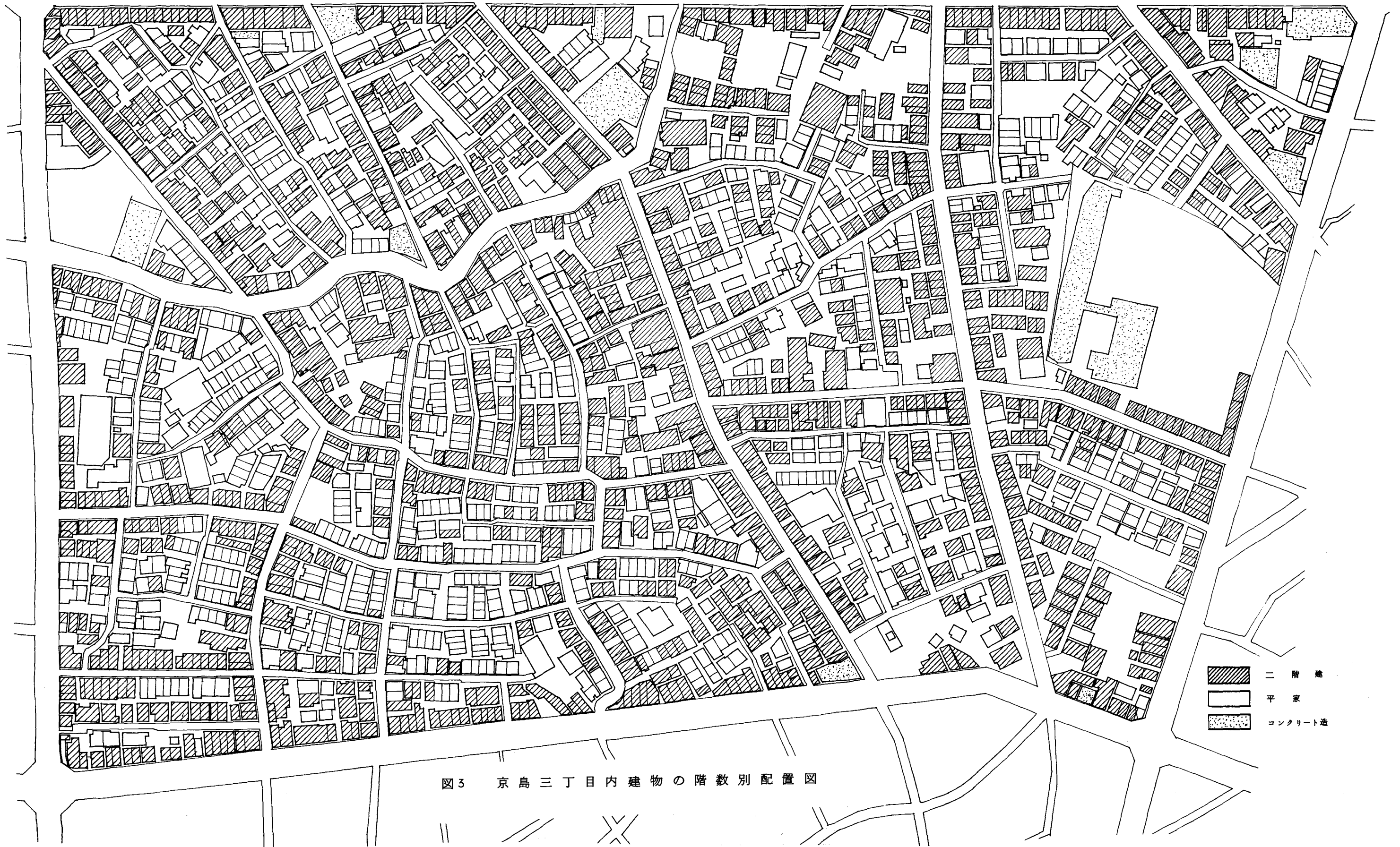


図3 京島三丁目内建物の階数別配置図

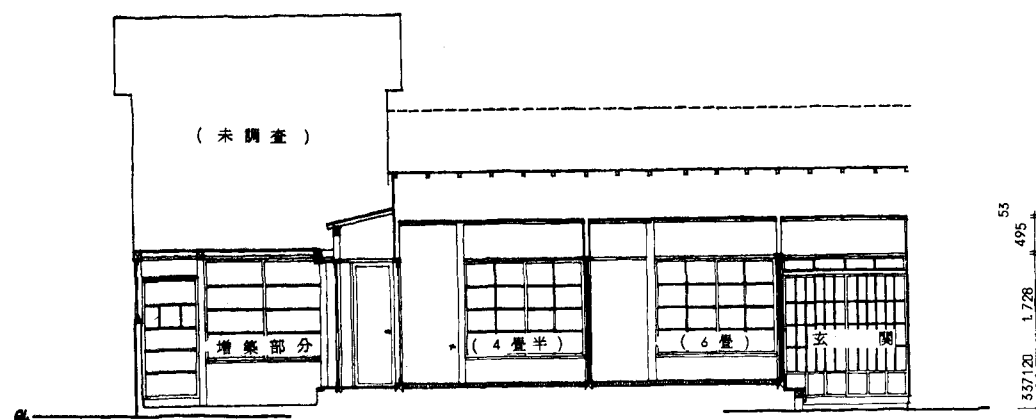




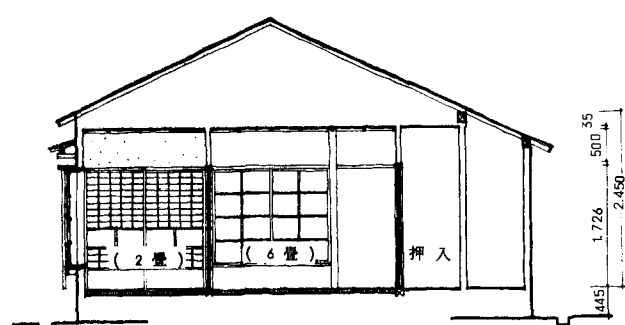
図4 京島三丁目内建物配置図

縮尺 1000分の1

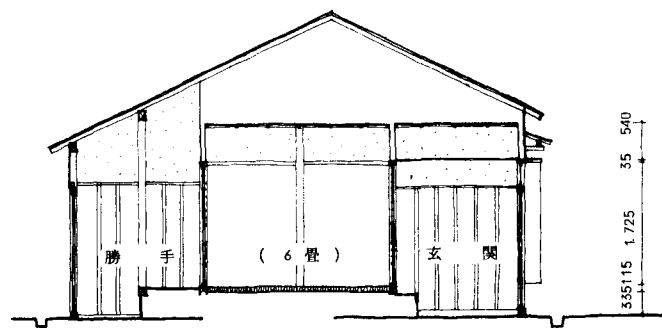
図中のA・B・C……Jは実測調査対象家屋を示す



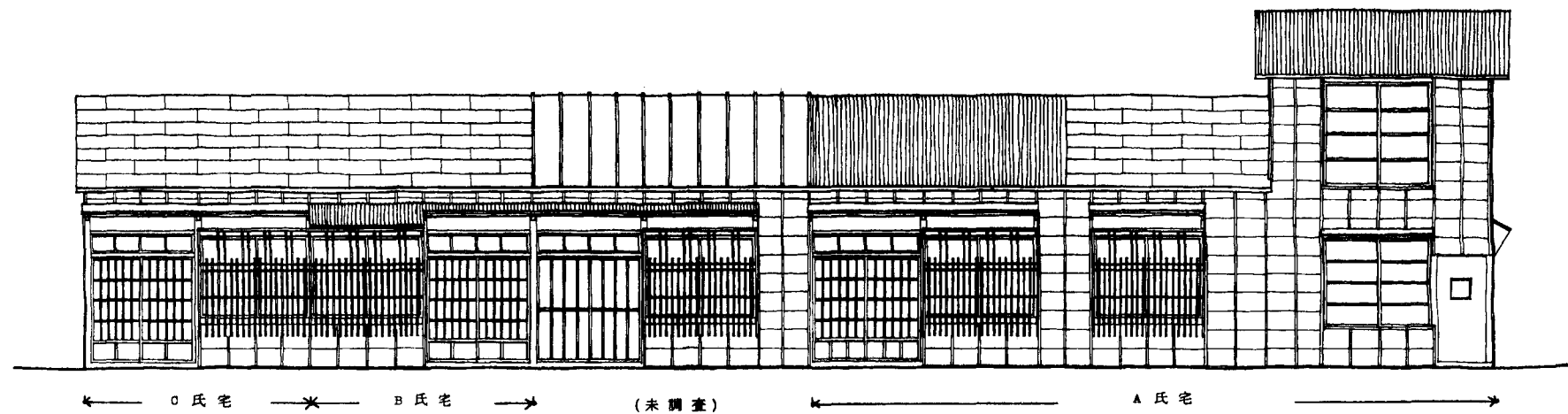
A氏宅断面図



B氏宅断面図



O氏宅断面図

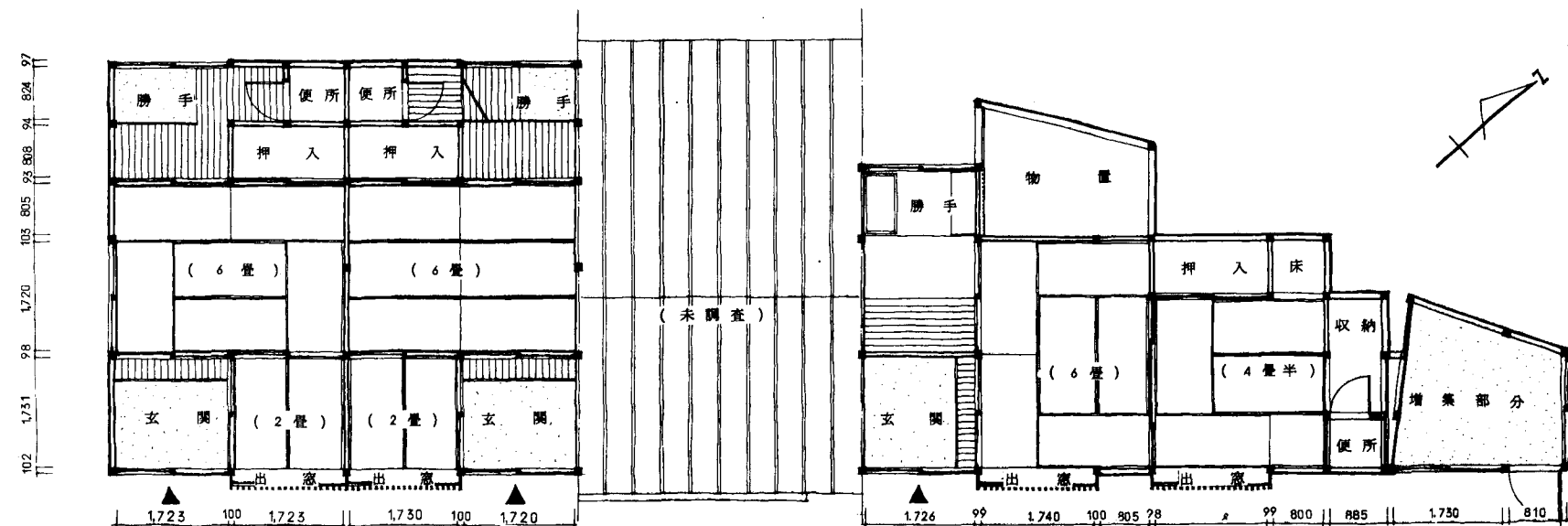


O氏宅

B氏宅

(未調査)

A氏宅

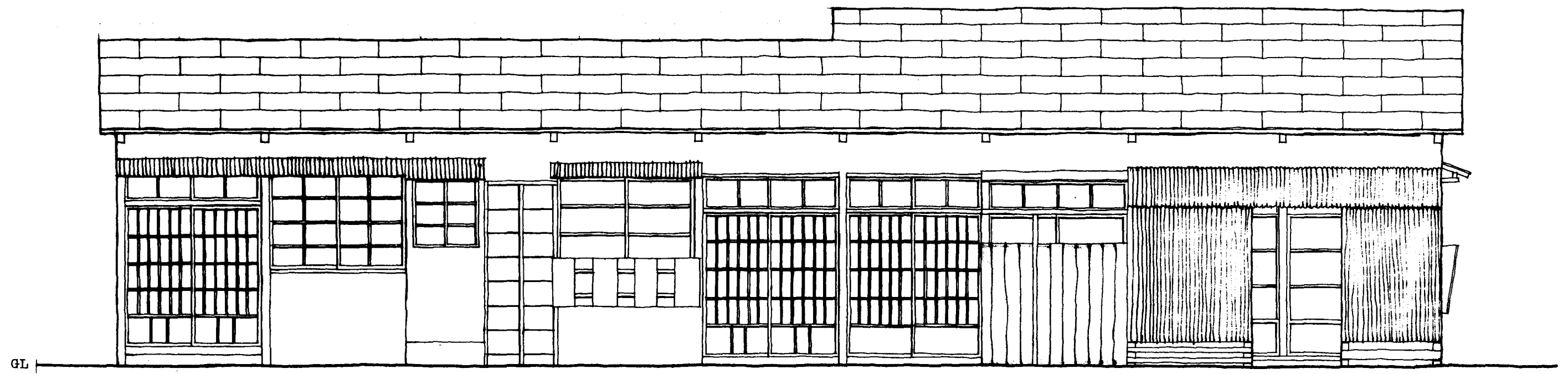


O氏宅平面図

B氏宅平面図

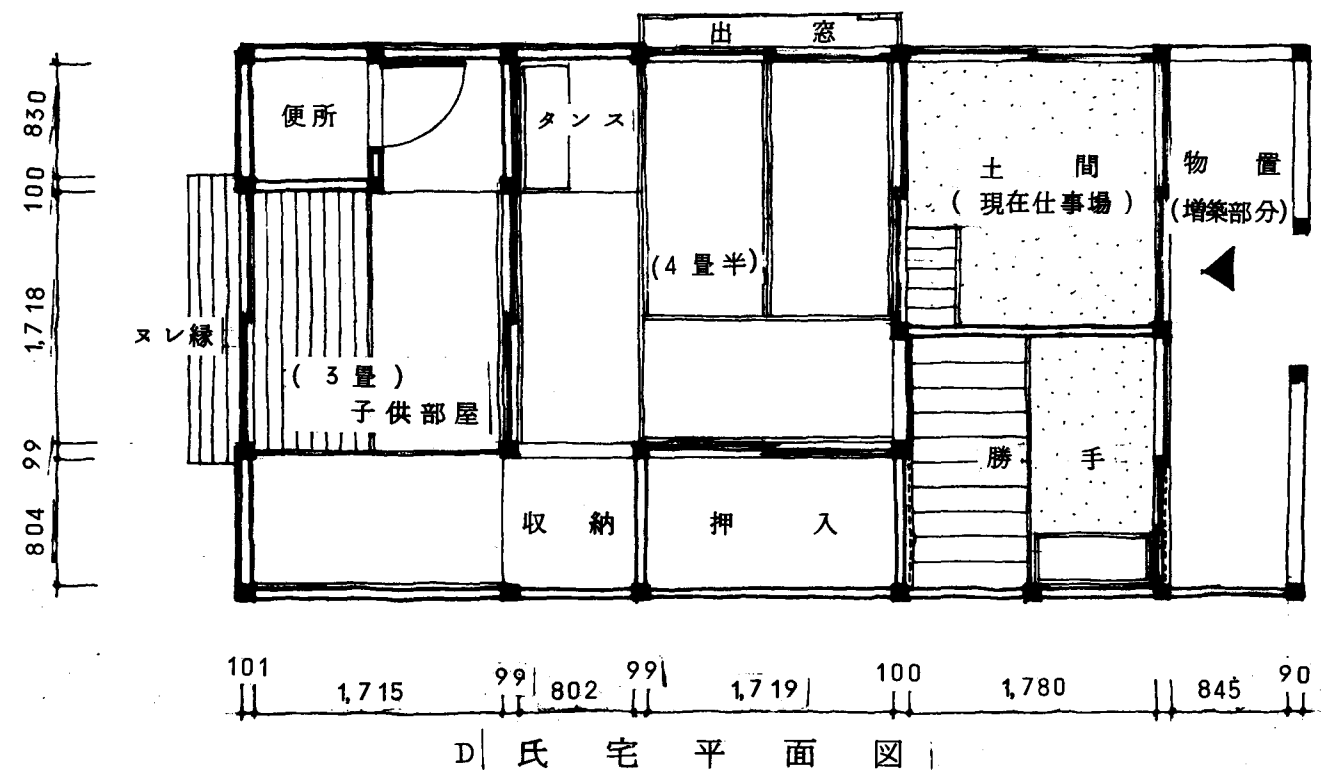
A氏宅平面図





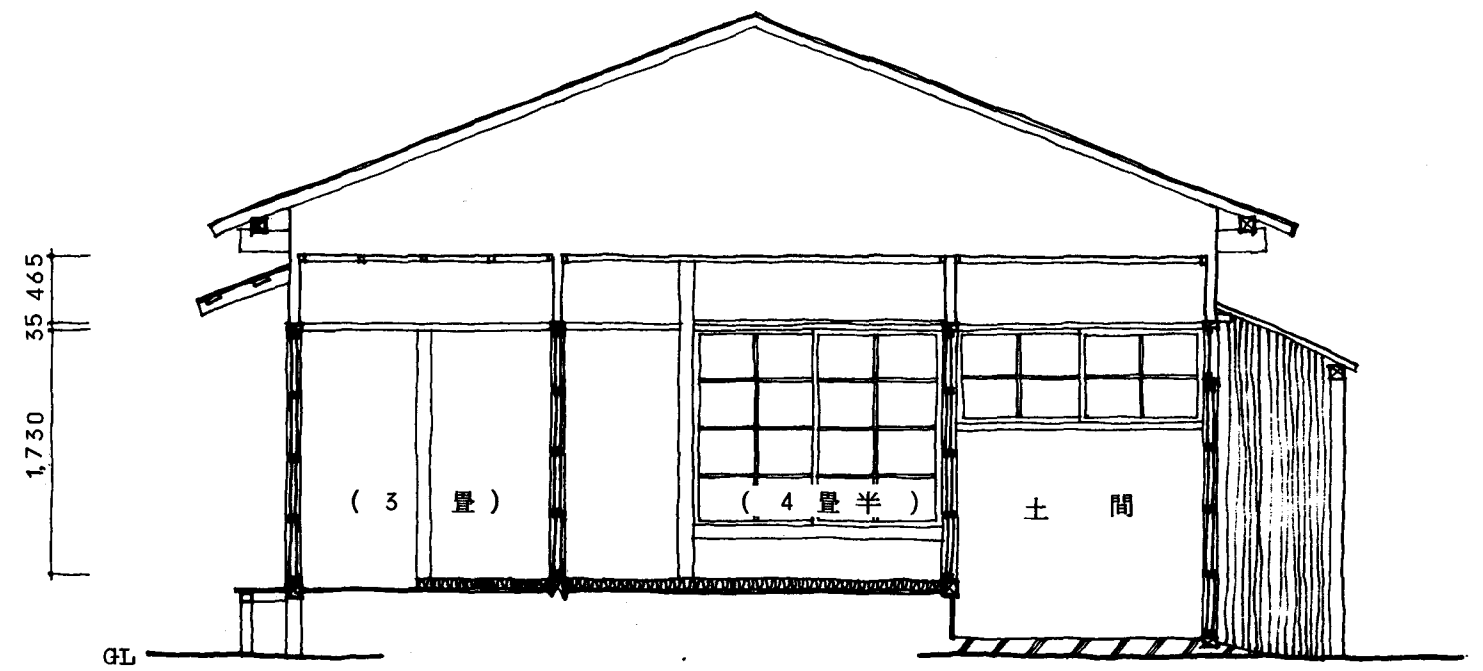
立面図

← D 氏 宅 →

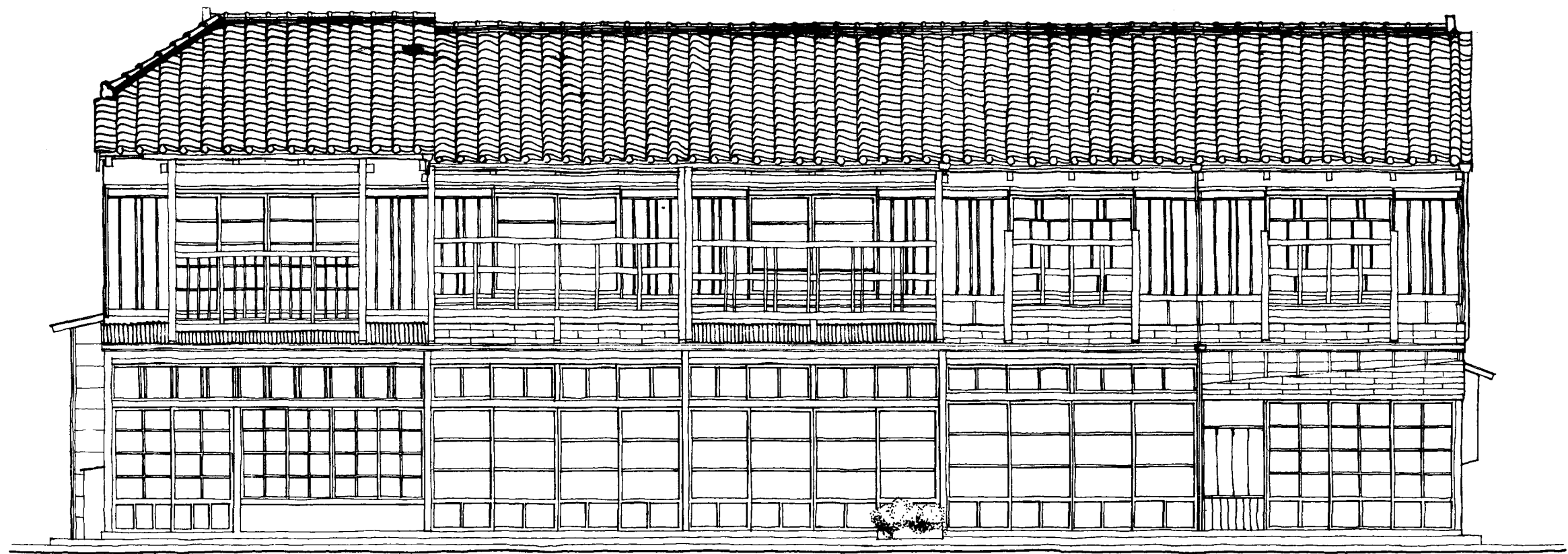


D 氏 宅 平 面 図

図 6



D 氏 宅 断 面 図



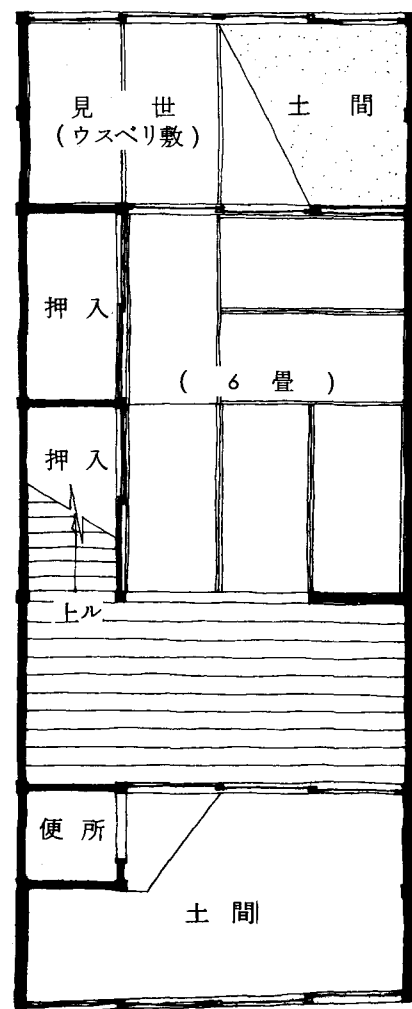
← Ⅱ 氏 宅 →

立 面 図

115 3,512 116  
( 一 階 )

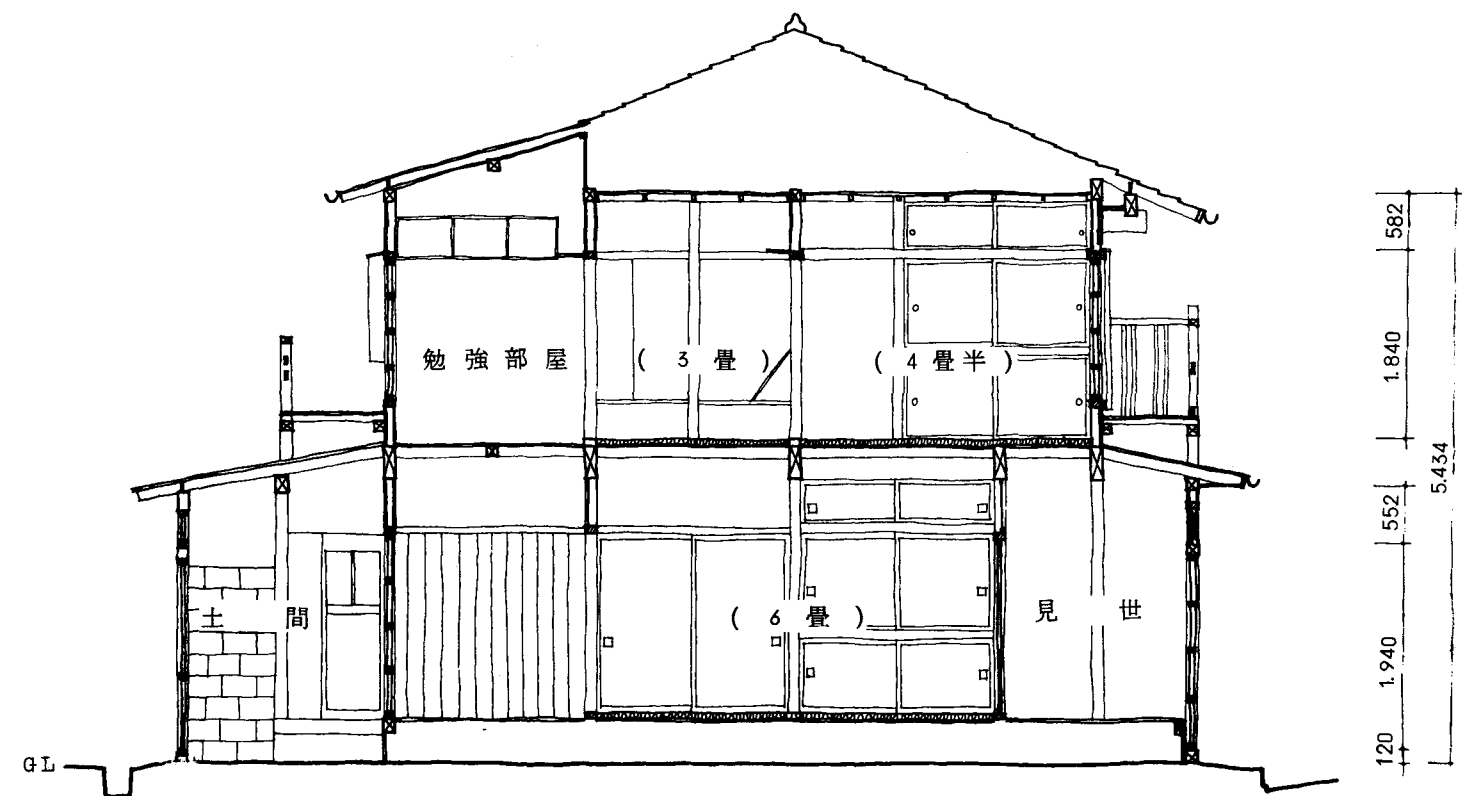
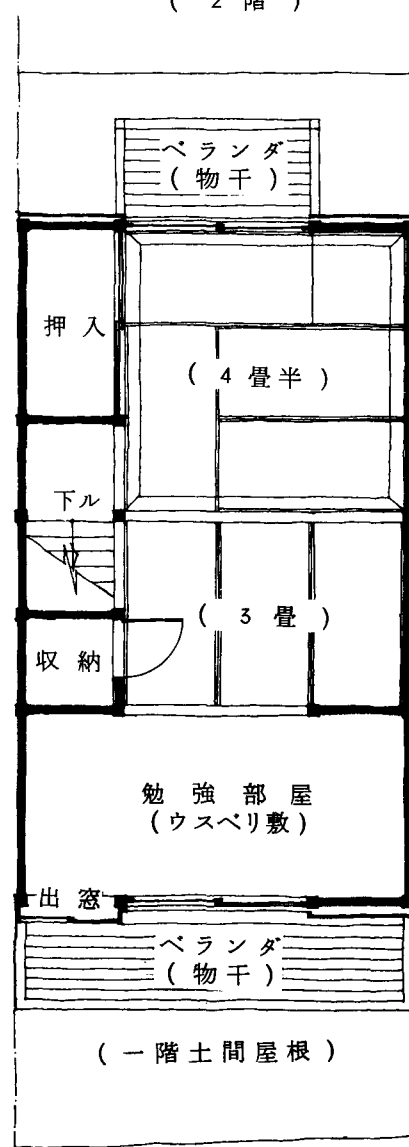
( 2 階 )

116  
810  
115  
810  
100  
1782  
99  
1723  
98  
1711  
100  
1030  
100  
1050

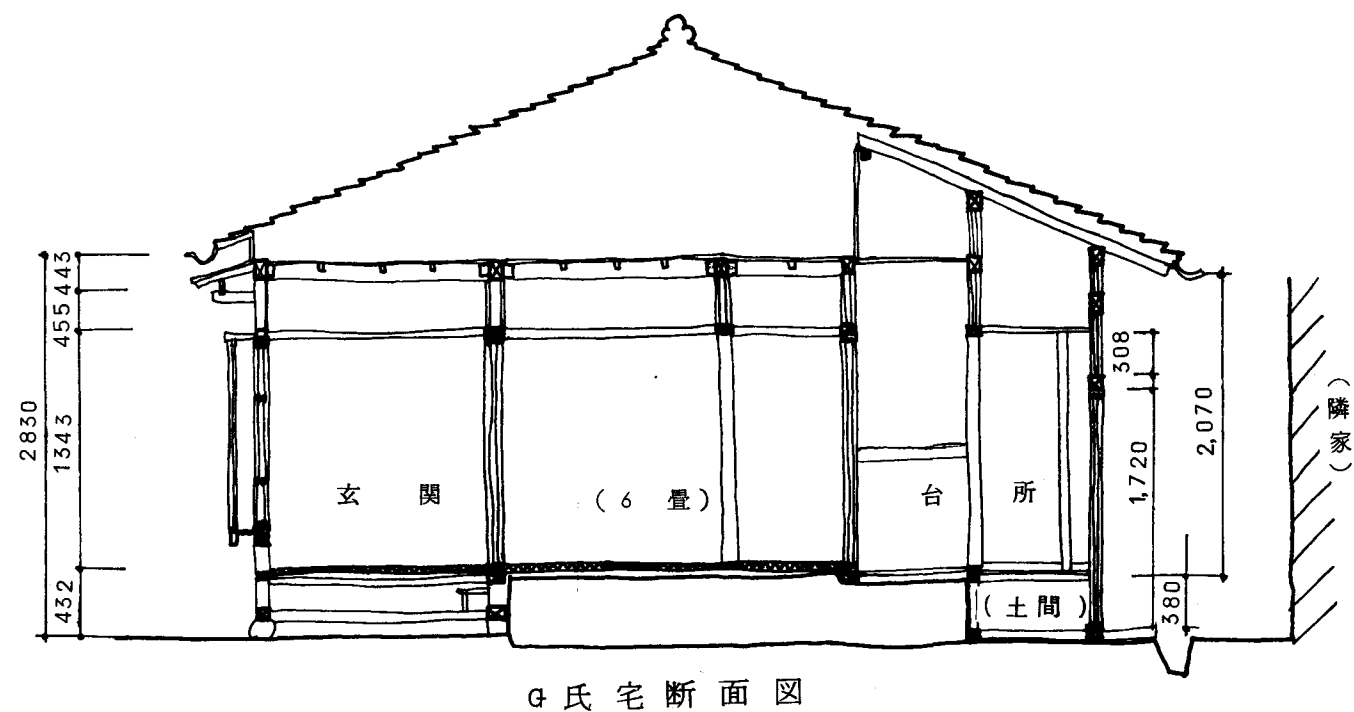
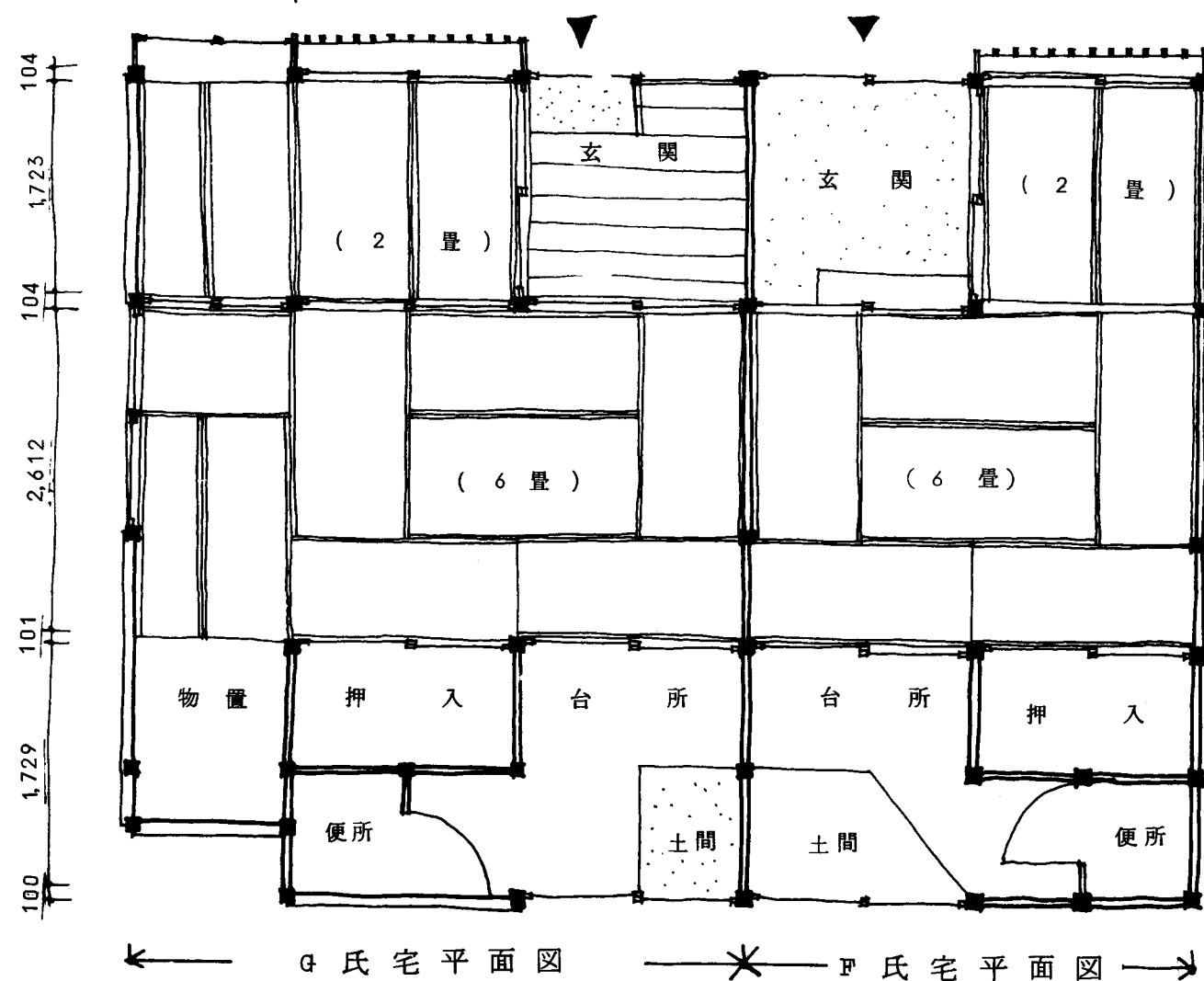
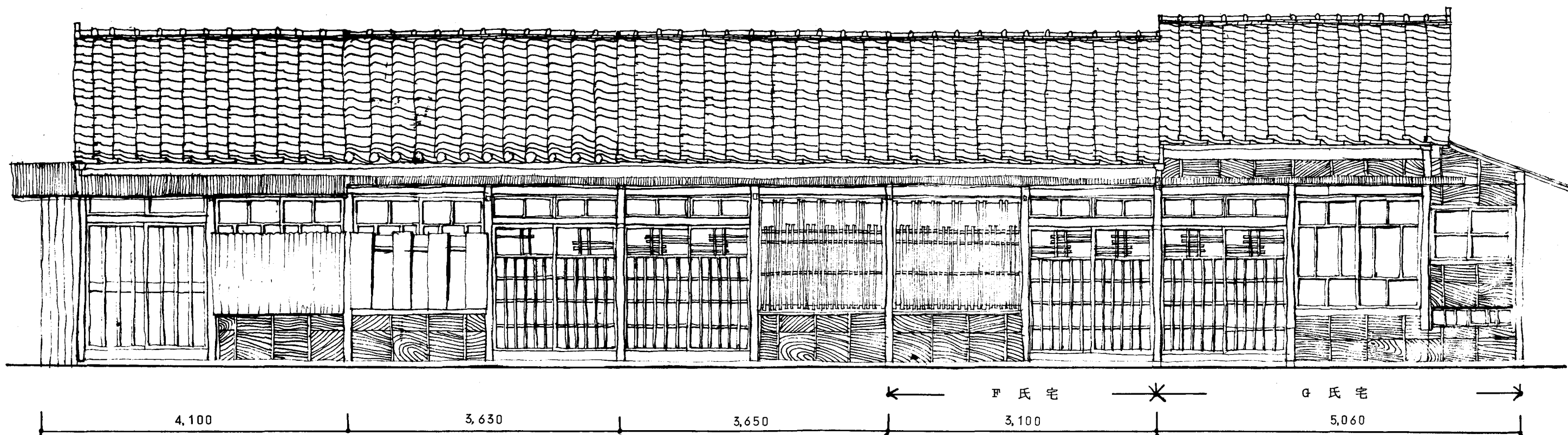


△

Ⅱ 氏 宅 平 面 図



Ⅱ 氏 宅 断 面 図



G 氏宅断面図

図 8

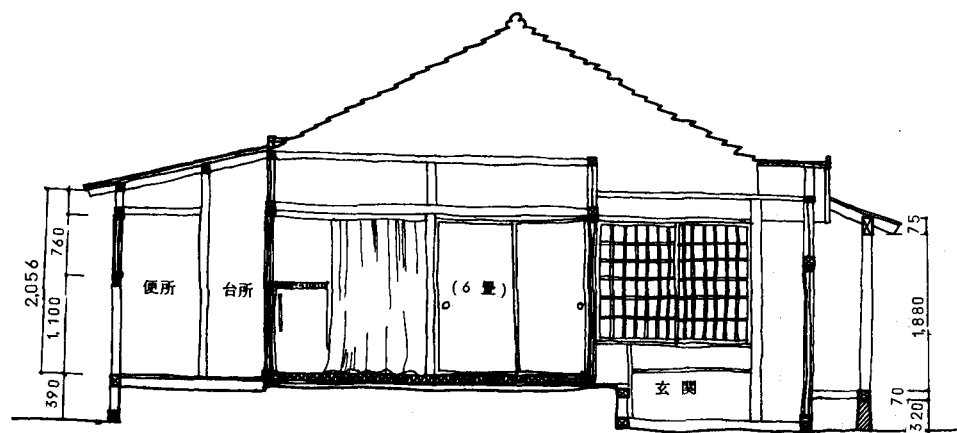
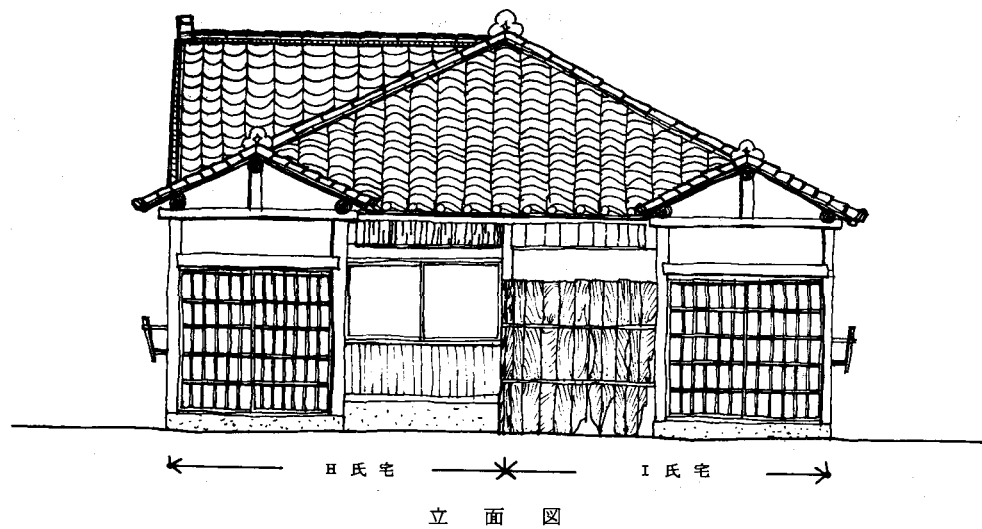
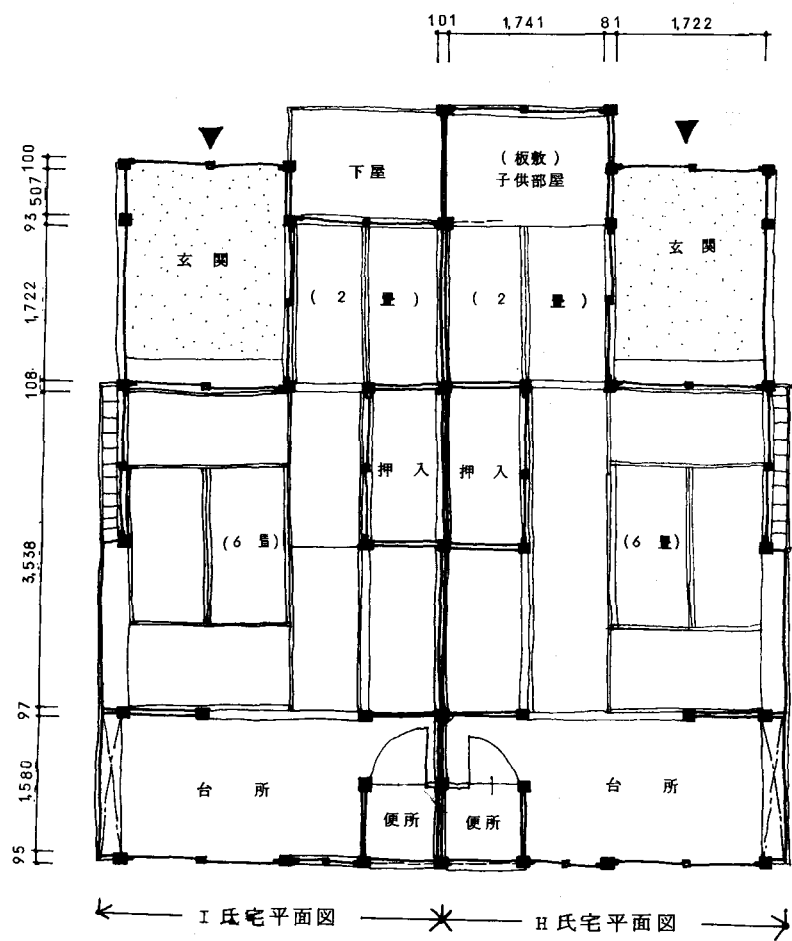
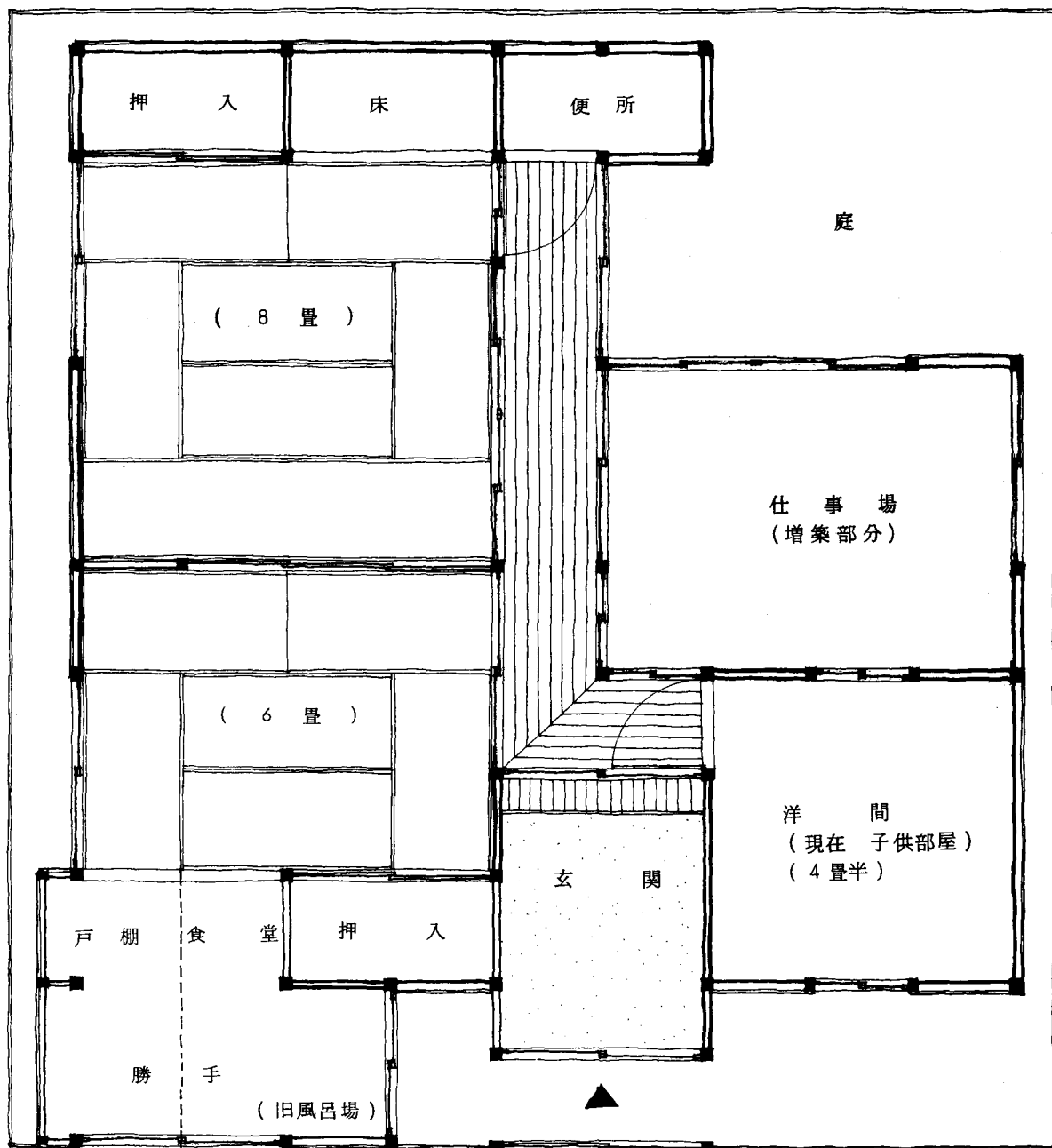


图 9 H 氏宅 断面图



タタミ寸法

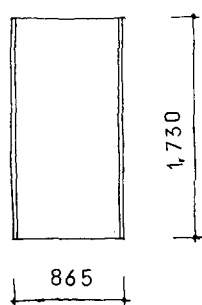


図 10 J 氏 宅 平 面 図

昭和46年9月15日 印刷  
昭和46年9月30日 発行

印刷物規格表第2類
印刷番号(46)924
刊行物番号(S) 7

都 市 研 究 報 告 第24号

編集・発行 東京都立大学都市研究組織委員会

代表者 中 野 尊 正

東京都目黒区八雲 1-1-1

印刷所 株式会社 三 元 社  
東京都豊島区西巣鴨 1-36-16